



TITLE:

青唐の馬と四川の茶 - 北宋時代四川茶法の展開 -

AUTHOR(S):

梅原, 郁

CITATION:

梅原, 郁. 青唐の馬と四川の茶 - 北宋時代四川茶法の展開 -. 東方學報
1973, 45: 195-244

ISSUE DATE:

1973-09-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/66502>

RIGHT:

青唐の馬と四川の茶

——北宋時代四川茶法の展開——

梅 原 郁

はじめに

北宋の後半、正確に言えば神宗の熙寧七年（一〇七四）から欽宗の靖康二年（一一二七）まで、ほぼ五十年に亘り、主として成都を中心にした四川と、漢中及び關中の陝西、そして甘肅に茶の專賣、當時の言葉で言うところの榷茶法が施行された。これらの地方では、北宋の前半、中原や江南といった東部諸地域で榷茶法が行われていた時期には、かえって茶の自由販賣が認められていた。ところが、複雑な經緯の後、仁宗の嘉祐四年（一〇五九）、百年に及んだ東部の專賣制が終止符を打ち、それから十五年をすぎではじめて、恰もいれ替りのごとく四川とその隣接地の一部は茶の專賣制の下に呻吟することになる。私はさきごろ、中原地方の茶法について、意識して四川のことに觸れず、私論を開陳するところがあった。^①しかし、宋代の茶法を語る時には、どうしても四川の茶法を避けて通るわけには行かない。そこで本稿では、改めて焦點を北宋後半の四川茶法に絞り、些か考察を加えて大方の御批判を乞うことにした。

宋代四川の茶法については、古くは松井等氏の業績があるが、最近では河上光一氏が二つの論考を發表されている。^②河上氏の高論はどちらかというと、直接生産者である園戸の問題や、茶の買上・賣捌機關の解明に主力が注がれ、この時期の四川茶法を、時代の流れに沿って歴史的に把えたり、あるいは、當時の政治・經濟・社會の有機的連關の中で、綜合的

に明らかにする方向は、必ずしも十分でないように思われる。従って私は、客觀的情勢の推移、あるいは中央政府の方針や茶法擔當責任者の立場などを十分検討しつつ、四川の茶法が具體的にどう變遷し、それがどのような意味を持つかを、五十年間を通してやや細密に考察してみた。これによって、刻々變化する茶の專賣制の大筋がまがりなりにもつかめ、四川茶法の實體をよりヴィヴィッドに浮び上らせることができるのではないかと考えている。いうまでもないが、北宋の中期ごろになると、四川の茶法といっても、一地域の限られた個別問題としてそれを取扱うことは、最早不可能である。それは、中央政府の軍事・財政・政治問題と密接に關連し、また西方の異民族との外交・經濟問題とも絡み合い、少し突っこんでゆくとかなり複雑である。四川の茶法を成立させる背景を探る方が、私にとっては食指をそそられるし、事實その方が單に茶法の制度的側面をとときあかすより重要であるが、本稿ではまだ大體の見通ししか立てられなかった。ところで、數世紀のちの明代、茶馬貿易をめぐって四川の茶法は再びクローズアップされることになる。昨年公刊された谷光隆氏の勞作『明代馬政の研究』の第一篇「茶馬貿易の研究」では、詳細にその有様が描かれている。そこで明らかにされた事柄の多くは、すでに北宋の後半に於いて試みられ、その原型が作られていたと言つてよい。宋代の四川茶法を明確にすることに、宋と明の同異が一層はつきりし、兩方の茶馬貿易の理解が更に深まるのではなからうか。

本論に先立って、ここで敘述上必要な地理上の概念規定をしておきたい。まず、宋代に四川という場合は、現在の四川省のほか、陝西省南部の漢中の地を含むことが大前提となる。私が四川と言う時はこの宋代の四川を指す。ここで扱う時期、四川は、岷江流域の成都盆地を中心とする成都府路、嘉陵江に沿った梓州路、重慶より東、長江の險をはさむ夔州路、そして漢水上流の漢中と、陝西への門戸を扼する山岳地帯の利州路の四路に區分されていた。茶法の上で四川と言う時には、重心は成都府路と利州路にあり、他の二路はむしろ附隨的である。ところで、史料面には、茶法と關連して川峽あるいは川陝という用語がしばしば現われる。峽と陝が良く似ているからどちらかが誤用されていると考えれば簡單だ

が、そうはいかない。兩者の關係を明確にしておかぬと、茶法の範圍の問題の時にいろいろ厄介なことが起る。少くとも私の考證の結果では茶法上重要な神宗から哲宗時代までは、川陝という用語では説明しにくい部分が多く、すべて川陝で一貫させた方が妥當である。⁶⁾ところが、徽宗時代に入ると川陝つまり四川と陝西という用例が出現し、南宋になるとその方が一般化して川陝はむしろ減少するように見受けられる。従って私がここで引用した史料に川陝(陝)が出て來た時は、テキストの字の如何を問わず、殆んどの場合川陝||四川として解釋してある。北宋のはじめ、四川は西川路と陝西路(峽路)に分れていた。この兩路を略して川陝と稱したが、これが雅名として残り、川陝路乃至川陝四路という用語が使われたと思われる。⁶⁾

次は陝西・甘肅を管轄する宋代の路の問題である。北宋中期までは、この地域は陝西路あるいは陝府西路と稱されていたが、神宗時代、京兆府(長安)を中心とした關中及び汾水・洛河流域を含む永興軍路と、鳳翔府以西の秦鳳路とに二分される。さらに熙寧五年(一〇七二)王韶による西方經營の進展に伴い、秦鳳路の西部をさいて熙河路新設という次第となる。他方、仁宗の慶曆年間以來、對西夏防衛の目的で、西北邊一帶に、安撫使の管轄區域と一致する秦鳳・涇原・環慶・鄜延という四軍事路が設けられた。陝西四路と呼ばれる場合がこれで、のち加えられた、永興・熙河と合わせて陝西六路という言い方もある。このため、現在の陝西・甘肅から青海東部地方は、宋代では、轉運使路で言えば、永興軍・秦鳳・熙河の三路となり、安撫使の軍事路で言えば永興路は永興・鄜延・環慶の三路、秦鳳路は、秦鳳・涇原兩路、熙河路は轉運使路と重なる形となる。この小論で私が頻用する西邊とか西部邊境とかいう用語は、だいたい秦鳳路の秦州以西を念頭に置いていると考えていただきたい。

本稿の成るに當つては、河上氏の高論を基盤にさせて頂いた點が多いが、それとともに重複する部分はあるだけ省略するように心掛けた。彼此參照願えれば幸甚である。また佐伯富氏の『宋代茶法研究資料』は、今回は特に活用させてい

ただいた。茶法資料の大部分を編年順に排列して下さっているこの書物は、前後關係や地域關係を考える上で極めて有用であった。はじめに記して謝意を表する次第である。

一 權茶法の開始

(1) 李杞の茶法

宋代に四川で權茶法が開始されたのは、周知のように神宗の熙寧七年であつた。これ以後、靖康の變に至るまでの半世紀、四川の茶法は專賣制度の例にもれず、屈曲した道筋を辿る。その跡はやはり一度はこまかく調べてみる必要があるであろう。私はさしあたって、この五十年間の四川茶法の展開を、直接その局に當つた責任者たちを軸にして、ときほぐして行かうと思う。彼らは、概して言えば、決して科擧官僚體制の中のエリートではなく、その官位も低く、従つて宋史の列傳や文人たちの墓誌銘に顔を出すことは稀である。彼らは宮廷の議論に口角泡をとばしこそはしなかったが、現場にあって新しい經濟政策を率先して推進した實力者であり、彼らの交替によって、茶法がかなりの制約を受けたことは見逃し得ない。勿論、大きく見れば、中央政府の新法黨と舊法黨の勢力争いが、四川の茶法にも基本的に影響を及ぼしたことは否定できぬ。しかし、こと四川の茶法に關しては、現場の最高責任者たちの動向に注意を拂わねばならぬことは以下の敘述で判つていただけるであらう。

王韶による熙河經營^⑦にメドがついた熙寧七年四月、李杞と蒲宗閔の二人が、成都府の市易務調査を名目に、まず四川へ派遣された^⑧。これより先、王安石の市易法の一環として、成都府に市易務を設け、そこから銀を支拂つて茶を買入れようという瀨ぶみの政策が實施された^⑨。二人は表向きはそれをより強力に推進するはずになっていた。李杞の官職は太子中舍

で三司幹當公事というから従八品の大藏省課長クラス、蒲宗閔はそれより下の正九品の著作佐郎・梓夔路察訪司準備差遣という、いずれも科擧出身ではあるが下級の實務官僚であった。二人の出身や來歴はよく判らない。ただ蒲宗閔は、中國に住みついたアラブ人の子孫がつける蒲姓を持ち、また特異な習慣を列傳の中で書きとめられている四川の閬州新井出身の蒲宗孟と輩行を同じくする可能性が強いことから、恐らく四川出身で、この地方の實情に通曉した新法系の人物ではなかったかと想像される。

經畫成都府利州茶貨という肩書⁽¹²⁾を與えられた李杞らは、七年四月から十月にかけて、まず成都府路の主な茶の產地である、雅州の名山・蜀州の永康・邛州、やや遅れて漢中の興元府と洋州の五州縣で生産者より茶を買上げる買茶場を設け、買付けた茶を秦鳳・熙河に運搬する構想をえがき、一部はただちに實行にうつされたと考えられる。同じ年の十一月に入ると、李杞は提舉成都府・利州・秦鳳・熙河等路茶場公事、蒲宗閔は同提舉云々という長い官名をつけられ、成都と秦州に創設された茶場司を舞臺に、本格的に榷茶法に取組むことになった。茶場司の提舉は提點刑獄待遇、同提舉は提舉常平待遇と定められ、一路の最高官である轉運使よりランクは下であったが、次第に勢力を持つにつれて發言力を増し、のちには轉運使や州縣官などと、いろいろなトラブルを起すことになる。

四川の榷茶法は熙寧七年十一月の茶場司設置をもって正式に開始されたと言えようが、一口に榷茶法といっても、その内容は時代によってかなり大きな差異がある。この時點では專賣といってもむしろ統制は緩く、茶の流通過程で課せられる商稅(稅錢)と、生産者から買付け、商人に賣り渡す茶場の買賣の中で抽出するマージン(息錢)の中から、毎年四十萬貫を熙河路の買馬と糧草買付にまわすという目的が果せればそれで良いといった程度のもものと見做される。ところで、榷茶法の本論に入る前に、いったいそれ以前の四川の茶の生産と販賣はどうなっていたかを一瞥しておかねばなるまい。

五代の後蜀が茶の專賣を行い、宋になって一旦それが撤廢され、再びそれをいじろうとしたことが太宗淳化四年(九九三)

の王小波・李順の大亂の一因となった経緯は、蘇轍の語るところであるが、より詳しいことは史料制限から判らない。所謂「均産一揆」に懲りた宋王朝は、四川の茶はすべて民間の自由販賣にまかせ、生産者は兩稅戸として扱い、流通・販賣過程で商稅を徵收するにとどめていた。かくて、中原・江南一帯で、十三山場六榷務を基點に、榷茶法が實施されていた間も、少くとも四川内では茶は自由商品として、何ら統制を加えられなかったのである。ではこの時期の四川茶の販路はどの範圍であつたろうか。

熙寧七年以前の四川茶の販路は二つ想定される。一つは漢民族の間で消費されるもので、これは更に二つに分けられる。まず四川内部で飲用される部分がある。四川に於ける茶の主産地は、名高い雅州蒙山を中心とした成都府の西北から西南にかけての低山地帶と、漢中の漢江をはさむ山地である。これ以外にも後者に隣接する三泉縣や山を越えた巴州、あるいは揚子江に沿った達州・涪州などという産地も史料に散見する。しかし、成都と漢中のものが質量ともに他を壓倒し、その市場も最も廣かつたとみて大過なからう。ただ夔州などの後進地、とりわけ農村では粗惡低廉な土産茶を飲用していたかとも思われる。第二は四川の茶を陝西に運んで賣捌く部分である。陝西には江南地方の茶も當然入っていたが、少くともその西半部は、四川の茶のよいお得意先であつた。榷茶法以前には、陝西の商人たちは解州の鹽や藥物を持って棧道を越え、蜀の茶や物貨を携えて歸り、彼らの往來は盛んであつたと言われている。

二つ目の四川茶の市場は異民族である。これまた二つに分けて考えるのが適當であらう。第一は成都府路の西部山岳地帶の諸州——南から黎・雅・威・茂——と更に北にのびる利州路の文・龍、秦鳳路最南の階州において、チベット系少数民族と交換される茶である。これら地方、特に成都府路の諸州で茶と交易される馬は川馬と呼ばれる。北宋末期の榷茶法時代の例をひくと、例えば黎州の年間買馬額は三千から五千頭で、量もたいしたものではない上に質が悪く、戰馬として使えぬことは勿論、成都から牧養のため鳳翔府の沔陽監に運ぶ間に死ぬものが多く、正直いってこの方面の異民族を懷柔

する羈縻政策としての役割を果すのがせいぜいであつたと伝えられる⁽²⁰⁾。南宋に入り、西北邊境から良馬が入りにくくなると、改めてこの地域の馬が問題になるが、本稿ではそれに觸れない。ただ、こうした四川西邊の買馬は、次に述べる秦鳳や熙河の買馬とはつきり區別すべきことだけは指摘しておきたい。第二は秦州を中心とした陝西省の西部國境に送られて、この方面の異民族、チベット系の青唐族に賣渡される茶である。この茶のちには馬の輸入と表裏の關係に置かれたが、榷茶法以前では、どのような經路で四川茶が青唐族の手に渡っていたか實はよくは判らない。

北宋中期以前、蕃族自身もしくは蕃・漢の商人によつて買馬の中心地秦州に持ちこまれた馬は、券馬法と呼ばれる方法で中央に送られた。券馬法とは買馬場で馬が五十、百頭にまると、道中の芻糧と運搬費（二匹一貫）を與えて京師へ送らせる。開封に來た蕃人には滞在費と酒食が支給され、估馬司が馬の値ぶみをして代價を支拂う。蕃人はそれで種々の物資を買つて國に歸るといふ方法である⁽²¹⁾。彼らが銅錢又は銀絹で代價を拂つて買う物資の中に茶が含まれたことは間違ひなからう。これは馬の扱いに慣れた異民族に輸送をも請負わす方法であつたが、別に省馬乃至綱馬と呼ぶ、官が輸送を受持つ方法もあつた⁽²²⁾。榷茶法時代行われたのは主としてこの綱馬法であつたと考えられる。

さて、こうした販路を持っていた自由通商の四川茶が統制の下に置かれるようになったきっかけは、多くの人が指摘する通り、王韶の熙河經營にあつたことは疑いない。ただ問題の焦點は私は通常言われる馬の交易もさること乍ら、熙河路經營及びそれと關連する中央の財政上の理由におくべきであらうと考える。王韶と彼をバックアップする王安石、神宗の意圖がどうであれ、熙河路の經營は事實としてカネを食うものであつた。王韶はそれまで秦州にあつた貿易・商業センタ一の市易司を熙州に進出させ、その収益と現地に於ける田土開發によつて、何とか軍費を中心とした經費をまかなう計算をしていた。しかし、反對派の惡口中傷を差引いても、彼の思惑通り問屋はおろさなかつた。何よりも緊急なのは第一線の兵士と軍馬のために食料と草秣を調達する問題である。それらを熙河路の中で自給することは不可能だつた。そこで、

解鹽の取引、四川の交子など、政府發行の手形類を割引き、商人に糧草を他地方から運搬納入させる方法がとられたが、そこに姦商が入りこむ餘地が多く、財源に苦慮せざるを得なかった。そこで眼をつけられた一つが四川の茶利であった。李杞らは、四川と陝西を榷茶法でしやることで、茶の商税と專賣收益の中から四十萬貫を捻出し、これを熙河路に送って馬と糧草の買付けにまわしたのである。四十萬貫の利潤をあげるために、先にあげた各州縣の買茶場管下で生産された茶はすべて官に買上げられ、それに何割かのマージンがついて、商人に卸されることになる。

これとは別に、西方異民族との馬貿易を對象とした茶がある。熙寧七年七月に出され、八年二月に追加された次の命令がそれと關係する。即ち「川茶（具體的には雅州名山・洋州・興元府大竹茶）を秦鳳路に運び賣捌こうとする者は、茶の出產州縣で長引（販運許可證）を買って賣捌地と期限・數目の指定を貰い、熙州・秦州・通遠軍・永寧寨と岷州の賣茶場に賣渡す。違反者は罰する」といった趣旨の史料がそれである。²⁴⁾これは明らかに商人の運搬を前提していると解釋され、秦鳳・熙河の賣茶場では、この茶を馬との交易あるいはその地方の市場にふり當てたと考えられる。要するに、李杞と蒲宗閔の手で始められた四川榷茶法は、專賣といってもかなりルーズなもので、これまで自由販賣で甘い汁を吸っていた商人達の利益をそれほどひどく侵害したわけではなかったと言って差支えなからう。

(2) 青唐の馬

話は少し横道にそれるが、今後の論旨とも關係があるため、ここで、茶と交換の對象として問題になる馬について、まとめて私見を述べておきたい。

いったい、北宋時代、騎兵用の戰馬をはじめとして、儀仗・驛遞・官員騎乘・輜重など廣範に使われる馬は、原則として、西・北方の異民族からの輸入でまかなわれていた。國內に於ける馬の飼育と増殖は、數多くの官營牧場の設置や、民

間への強制飼育割當とも言うべき保馬法・戸馬法など、さまざまに試みられたが、結論的に言えば完全に失敗であった。とりわけひどいのは官營牧場で、河南北の十二監で熙寧二年から五年までの三年間、産み出した馬は僅かに千六百匹餘り、うち騎兵用にできたのは二百六十四匹で、あとは郵傳に使うのもやっという有様であった。⁽²⁵⁾

北宋の前半期には、輸入馬の中心は山西と陝西の北部長城地帯の府州・豐州などで、特に府州の馬は精良の譽れが高かった。⁽²⁶⁾ 恐らくこれら地域で買われた馬は、モンゴル系の馬であったのだろう。ところが仁宗寶元元年(一〇三八)の西夏の興起によって、この方面からの馬の輸入が杜絶えると、宋は別の場所から馬を補充せざるを得なくなる。こうして浮びあがって来るのが青唐族の馬に他ならない。

現在の甘肅省の西部と青海省の東境一帯、つまり、西から東へ流れる黄河の最上流をはさみ、その北側の湟水、南側の洮河一帯には、このころ、唐代吐蕃の末裔を呼號するチベット系の部族の住地であった。宋では彼らを一括して青唐族又は西羌と呼ぶが、湟水流域の青寧や樂都を據點とする青唐(青堂)族の下に數多くの部族が連合している状態で、絶えず離合集散や勢力争いが起っていた。ただ大勢からみると、五代から宋と時間の経過とともに、彼らは漢民族によって東から西へと追いつめられ、その多くは熟戸の名のもとに、懷柔・羈縻され、それに反抗するものは武力で壓倒されて、その獨立性と力を失って行きつつあったと言える。青唐族の最後の榮光ともいふべき時代は、十一世紀前半仁宗から英宗にかけてのツェンポ唃廝囉(royal stas)の統治期である。⁽²⁷⁾ すでに說かれているように、青唐・邈川・宗哥を根城に、南は河州から岷州、東南は甘肅省内部にまで勢力を擴げ、東北の西夏と對峙し、宋と西域諸國との交通路を支配した時期、それが唃廝囉の時代であった。彼らは馬・麝香・水銀などを中國に輸出し、中國からは金銀・絹帛・茶などを持ち歸った。當時彼らが、南下して来る強大な西夏に屈服せず、宋側と友好關係を維持せんとした理由は、やはりこうした經濟問題にあったと思われる。青唐及びそれと連合する諸部族長が宋に正式に朝貢に來る時は、前者が馬、後者が絹と茶を出すしきた

りになっていた點は、兩者の經濟關係を象徵している。

この青唐族たちの中に、何時から、どのようにして飲茶の習慣が擴がつたかは、あまり明らかでない。憶測を逞ましくすると、宋側の政策のために、彼らは茶を常飲することになってしまったとさえ思われる。「肉を食べ乳製品を飲む習慣の異民族は、そのために茶を珍重する」といった表現が出て来るのは茶馬貿易が始まってかなり後の時期である。まして、モンゴル地方ならいざ知らず、農耕可能な青唐族の住地あたりでは「ビタミンC補給のため茶は不可飲であった」というような理解は當嵌まりにくい。唐中期以降、吐蕃の境域にも少しづつ茶が流入していたであろうことは想定して大過なからう。さらに宋になって飲茶の習慣が西方邊境の異民族の間にもある程度擴まったことも事實であろう。しかし、それが決定的となったのは、彼らの馬を必要とし、その見返りに苦しむ宋側の意圖と政略にもとづいていたのではないだろうか。後にふれるように、西蕃は雅州の名山茶のみを欲しがるといわれる。名山茶は、少なくともそれまでの常識では、生産量も低く、評價の高い品である。何萬斤という大量の名山茶が、しかも異民族に渡される裏には何かカラクリが潜んでいるように思えてならない。

さて、西夏の獨立以後、北宋の後半、宋が西邊で購入した馬は、殆んどすべてが青海馬であつたと私は考える。熙河路の最高權力者の王韶は、熙寧七年の六月、黑城の夷人が馬を持って來ていると述べている。河上氏はこの黑城を西夏の故都カラ・ホトでなければならぬと述べておられる。そうすればここに登場する馬はモンゴル馬かあるいは中央アジアの馬で、青海馬ではなくなる筈である。しかし私は必ずしもそうは思わない。エチナ河下流のカラ・ホトから王韶のいる熙州までは、地圖上の直線距離でも七五〇キロ隔たっている。しかもこの一帯は、明白に西夏の勢力範圍であり、彼らが自分達の武力である馬を、他民族を介してでも宋に賣りこむといったことは、當時の宋と西夏の關係からみて甚だ不自然である。だいいち、黑城という地名がカラ・ホトの通稱のように言われるようになったのはもっと後のことで、北宋の半ばす

ぎ一〇七〇年代にそれが出て来るのは早すぎはしないだろうか。更に消極的ながら二つ反證がある。『宋會要』で「黑城夷人」と表出されている部分が『宋史』では「西人」と書き變えられている。⁽⁸²⁾この頃の通例では、西人とあれば、西羌・西蕃||青唐族を指し、西夏の人は「夏人」と明確に區別して使われている。青唐の部族が、自己の馬以外の馬を、仲介者として運んで来ることは少なくとも普通ではない。また、青唐關係の記録を讀んでいると「隴朱黑城」という地名にぶつかる。⁽⁸³⁾これは恐らく隴という水(川)の近くの黑城という意味であろう。黑城が例えば日本の鳥城のように普通名詞として存在した可能性は十分考えられるであろう。

斷わるまでもなく、私は、西夏が陝西から甘肅の西北部一帯を占據してのち、中國から西域へ向う交通路が、青唐を経由して東トルキスタン―龜茲・于闐など―へ伸びていたこと、それを通して人間や商品が往來したことは十二分に承知している。しかし、ことが馬となると、遙か漠北の蒙古馬や、あるいは中央アジアの所謂イリ馬が、于闐などの諸國の朝貢時の數の限られた馬を別として、どれだけ恒常的に商品として中國西邊へ齎らされたか、甚だ疑問に感じる。北宋中期以後、宋が西邊で購入した馬の數は年間一萬五千から二萬頭⁽⁸⁴⁾というところである。この數値はかなりソリッドなもので、明代にやはり陝西で買付けた茶馬貿易の馬の數一萬五千頭、民國時代の青海馬の年間輸出額二萬頭と符節を合している。海拔二千から二千五百米の高地草原で生育し、寒さと粗食に耐え、蒙古馬よりは戰騎としての運動性に劣るかもしれぬが、四川馬よりも大きな青海馬こそが、⁽⁸⁵⁾北方からの蒙古馬の輸入が中絶し、それに反比例して馬匹の重要性の増大した中國に持ちこまれた馬である、というのが私の考えである。そして、この青海馬と交換する物資として四川の茶に白羽の矢が立てられたのであった。

(3) 劉佐と茶法の進展

熙寧八年十二月、病氣を理由に李杞がしりぞき、翌九年四月、體量成都府等路茶場利害として四川に派遣されて來た劉佐が後任におさまった。⁽³⁷⁾彼は正七品上の都官郎中の肩書きを持つが、その來歴はやはりはっきりしない。劉佐は、恐らく蒲宗閔の舞臺廻しの上ののつて、幾つかの新しい政策を行っている。その一つは、從來、陝西商人が握っていた解鹽と茶の交易權を茶場司にうつし、その利益を手に入れようとするプランである。熙寧九年四月から、用意された二百一萬貫の資金をもとに、毎年、解鹽十萬席（一席は一一六斤）と四川茶六萬駄（一駄は百斤、當時名山茶一駄の價格は高くて三七貫省くらゐ）を茶場司の手で取引することが始まった。これは、當然商人が自由に四川と陝西を往復できなくなったことを意味し、影響するところは大きかったと想像される。折しも洋州の知事であつた文同は大約次のように上奏している。⁽³⁸⁾「これまで生産地の人民は、自由に茶を賣ることができ、そこで陝西の商人は鹽貨を持って町々や村々の店で賣り、あるいは山の中まで入つて來た。これによって洋州三縣二十四萬人の人々が消費する一日三千斤あまりの鹽がまかなわれていた。おかみが賣鹽場（多分州縣や鎮市の稅務がそれに當てられたであらう）で賣り出せば、おかみの利益は多いが、恒久的にそれを實施するとなると議論の餘地がある。」これ以下、彼は主として鹽の供給面に問題を絞つて疑問を提出している。文同は必ずしも眞向から、解鹽權賣に反對したものではないが、どちらかというと舊法黨的體質で四川出身の周尹は、別の具體例をあげて猛烈に反對した。⁽³⁹⁾解鹽十萬席というと、斤數は一千萬に上る。文同の言によつて計算すると洋州三縣の年間消費量は約百十萬斤であるから、十分の一にすぎない。漢中全體の消費量は多く見積つても五百萬斤には達しないと思われるから、残りは當然成都府などの四川の中心地で使われたはずである。本來、成都府路（西川）では、人口増加に伴つて鹽の絶對量が不足し、生産量の多い梓州・夔州（東川）から輸入しなければならなかつた。従つてこれら地方の鹽のほかに、解鹽もまた遠く成都

を市場とし得たわけである。自由通商の場合は解鹽の市場占有率は、商人が操作するのだから、それなりにきまっていた問題は少なかったろうが、政府がある年間販賣額をきめてしまうと、ノルマを果すためにいろいろな無理が出て来る。熙寧九年十一月、周尹が上奏を行った時點では、東川地方の井鹽と成都府路内の卓筒井鹽の販賣を禁止していたため、鹽價は一斤二百五十文（近くの梓州の鹽は七十文）に高騰し、下層の人たちほど苦しむという事態を招いている。「四川は四路に分れるが、實は一體で本來鹽の禁制はなかった。隣の東川の鹽を流通させず、數千里も外の解池から、成都に運んで賣り出すことはない」と周尹はきめつけている。劉佐が始めた解鹽の搬入と茶の搬出はここで、人を募つて、と言われているから、請負か雇用運搬がとられたのであろうが、その分を差引いても、茶場司は茶と鹽の兩方から相當量の利潤を抽出したと考えられる。ただこの方法は四川榷茶法反對派に恰好の攻撃材料となり、一年で中止に迫られてこまる。

もう一つこの時期で問題になるのは、四川の買茶場で、政府が生産者から茶を買い商人に賣渡す時に三割の息錢（マージン）をとつたことである。李杞の時代には、四川全域の生産者をすべて買茶場の組織の下にくみこんだわけでは必ずしもなく、主要な産地をひとまず握つた上での統制であつた。ところが、劉佐の時代は、その網の目を次第にこまかくし、法制・機構を整備して行つた段階として位置づけられよう。

熙寧九年十一月以前には、彭州の壩口をはじめ、眉州丹稜などの有名産茶地は、まだ榷茶法の規制範圍に含まれておらず、この時、「該當地方の商稅務が茶をすべて買上げることにする」という茶場司の奏請がはじめて認可されている。宋會要の四川買茶場の項を見ると、熙寧九年十一月の記事であげられている場所では、すべて翌熙寧十年に買茶場が創設されている。つまり、雅州名山や、興元府・洋州以外の數多くのこれら四川買茶場は、劉佐時代の終りに正式に創設されているわけで、これは四川の榷茶法が漸く本格化したことを物語るとみてさしかえなからう。「李杞がはじめて茶法を立て、一切、民間の自由賣買を禁止した。けれども徵收する利潤は四十萬貫の額にとどめ、熙河路に用立てた。劉佐と蒲宗閔

が長官となるや、利潤を多くとり、法規は嚴重になり、遠く離れた四川の人々は初めて苦しんだ」という蘇轍の言はこうした経過を彼なりの表現で述べたものである。

三割の利鞘も、こうした一連の動きの中から登場したことは、周尹が「最初、李杞が悪い制度（種茶法）をやり出したが、民間の利益をそれほど多く奪ったわけではなく、従って弊害はまだしも少なかった。劉佐がそのポストをとってかわってから、息銭は倍になり、下々を剝奪搾取するやり方ばかりする。」と言っていること⁽⁴⁷⁾で證明されよう。このことが何時から開始されたか、正確には判らぬが、熙寧九年から十年にかけての状況の一端は、當時、管下に幾つかの買茶場をかかえる彭州の知事であった呂陶が詳細に書き残してくれている。舊法黨の論客で、王安石さえ顔色なからしめたという彼は、茶の統制に正面から反対し、數度に亘り、長文の奏議をたてまつた⁽⁴⁸⁾。その主旨は、すでに河上氏も分析するところであるから、ここでは省くが、三割の利息については彼は次のような弊害を指摘している。即ち、買茶場で實力を持つ商人と牙人（仲買人）がグルになり、本來は商人が拂うべき三割のマージンを、強制的に生産者に肩代りさせる。以前一斤百文で茶を卸していた生産者は、その三割の三十文を差引かれて、六十から七十文しか買茶場から貰えぬ⁽⁴⁹⁾。つまり、生産者の大きな犠牲において三割マージンの種茶法が行なわれる現實がでて來るのである。後に觸れるように、四川種茶の開始期には、王安石も黒幕となり、全國的な市易法の一環としての位置づけがなされていたと思われる。成都と陝西の主要都市で、茶利を壟斷している大商人を抑え、商品流通を圓滑化しようという意圖は、實際は思い通りに運ばない面があった。呂陶が本當に抑壓された生産者の味方であったのか、それとも大商人達の代辯者で、新法反対のため、騒ぎをことさらに大きくしたかの穿鑿は暫らく措き、熙寧十年の三月から四月にかけて、彭州の導口、九隴など各縣の茶場で騒動が起り、棚口では三百戸、五千人の生産者がデモと打こわしに参加する事態にたち至った⁽⁵⁰⁾。ことの次第に狼狽した中央では、官が三割の利をとる規定を十年五月に撤回し⁽⁵¹⁾、改めて茶場司の眞のプロモーターである蒲宗閔がうち出した新プランを採用する

ことに決めた。それは次の三項目を骨子としている。⁽⁸⁾

(1) 毎年、四川茶四萬駄（四百萬斤）を秦州と熙河路に運び、該地の賣茶場で市價で賣捌く。なお商税と息錢（マージン）を決め、馬の買付と糧草の購入に充てる。

(2) 四川の民間で消費する茶は、各茶場がときどきの相場で買ったものを、一貫について百文のマージンをとって商人に賣り渡す。なお商人には買取價格によって長引錢（販賣許可證代）を納めさせる。

(3) 秦鳳の鳳州と鳳翔府と永興軍、環慶路（つまり陝西東部地方）の州縣は、以前のように通商地分とし、商人が四川の茶場で茶を買って歸ることを許す。

これらの規定は、この後、四川權茶法の中核となる重要なものであるが、その詳細な吟味は次章にまわしたい。

呂陶をはじめとする舊法黨側の反對論のもりあがりと、まのあたり起った騒動が、再び淳化の時のような大事件になるのを恐れた中央政府は、當面の責任者劉佐のクビを切り、同時にうるさい呂陶をも左遷することで事態の收拾をはかった。⁽⁹⁾ 劉佐の後釜に座ったのはこれまた四川邛州の出身で、當時河北の轉運判官として活躍していた李稷である。⁽¹⁰⁾ 時に熙寧十年七月、王安石はすでに江寧にしりぞき、熙河路の開拓者王韶はそれより早く、江南で不遇の日を送っていた。彼らが好むと好まざるとに不拘、間もなく元豐と年號が改まると、一人歩きしはじめた四川の權茶法は、廢止されるどころか、一層重要な使命を擔って新しい局面に突入することになる。

二 權茶法の進展

(1) 茶遞鋪その他

神宗治世の後半、元豐時代は、四川權茶法の完成期であった。この時代茶法を擔當した人物は、前半が李稷と蒲宗閔、後半が陸師閔であったが、いずれにしても、熙寧末の反對運動の効果はなく、統制は強化され、法制は細密化して行った。それとともに茶場司の権限は飛躍的に増大し、その横暴さの故にいざこざが起ることも稀でなかった。本章では先にあげた蒲宗閔の三項目を中心に、元豐前半期に於ける幾つかの問題をとりあげてみよう。

第一に、毎年四萬駄の茶を秦州と熙河路に運搬する規定があげられる。この茶は、これまでと違って、四川の買茶場から西方邊境に設けられた賣茶場へ、直接政府の手によって運ばれたわけである。一駄つまり一匹の荷馬が運ぶ茶の量は百斤⁽⁵⁶⁾で、西邊に於ける價格は當時二十五貫から三十七貫だった。この輸送を圓滑に運ぶため茶遞鋪と呼ぶ組織が作られる。四川から秦鳳に通じる交通路の要所要所に、運送仲繼地を設け、一定數の車輛乃至荷馬を置き、廂軍（輸送人夫）を配屬させるのがそれである。成都や漢中から陝西に出るには、名だたる蜀の棧道を越え、重疊たる山嶽峽谷地帯の道を上下しなければならぬ。當然陸運が主となるが、産地に近い成都周邊の一帯では水運も可能で、まず元豐元年五月に、三十隻の百料船とそれを操る兵士、總指揮の軍大將（胥吏がしら）といった組織が作られた⁽⁵⁷⁾。ついで九月には、巡轄秦鳳興利般茶鋪の名のもとに、茶遞鋪を管轄する責任者がきめられた⁽⁵⁸⁾。巡轄官は、のちに細分化されて行ったらしく⁽⁵⁹⁾、徽宗の建中靖國元年（一一〇一）には、綿州に役所を置く、巡轄綿州羅江至利州昭化縣界茶鋪とか、成都に居を構える巡轄成都府至邛雅州界茶鋪といった官職がみえている⁽⁶⁰⁾。また成都から東北の比較的平坦部や、秦州以西では荷車も使用されたようで、元豐五年五

月には秦州から熙州に至る間に二十八の車子鋪が設置され、やはり廂軍が配屬されている。茶の輸送の任務を負わされた廂軍は、給料と道途の難易による特別手當を支給されると言い條、刺青をされ、多くの身分・行動上の制限を受け、仕事は樂でなかった。河上氏も觸れておられるように、呂陶の表現を借りれば、「元豐はじめ、成都府の茶遞鋪に配屬された數百人の兵士は、一、二年の間に死んだり逃げたりしていなくなった」と言われ、民間人の雇用から強制労働徴發といった手段がとられ、問題をおこしている。この結果、のちに茶遞鋪の數をふやし、平均十五里に一鋪を設けて廂兵五十人を置き、總計二百鋪一萬人という尨大な數にふくれあがって行つた。この段階では、茶遞鋪の兵士一人は一日四駄(四百斤餘り)を受持つて、往復六十里(約二十五キロ)つまり二鋪分を運搬する計算となる。それでも彼らの苦難は減らず、劍陽縣の茶鋪では人夫がすべて逃亡し、人々が茶鋪を「納命場」と呼んだことが蘇轍の上奏にみえている。四川から陝西に越える道を重い荷馬を牽いて通るのは大變であつたし、商人はそれ故にこそ、莫大な利潤をあげることができた。商人、とりわけ政府に利潤を横取りされた富商大賈と言われる人たちの側に立てば、權茶法の結果出て來るこうした弊害は、何よりも良い茶法攻撃の材料であろう。しかし、逆の立場からみると、特權商人が吸う甘い蜜が、政府によって制限され、その分が別に役立てられている點を忘れてはならぬ。茶遞鋪運搬がとやかく言われながらも、以後北宋末まで續けられる事實を無視するわけには行かない。また、谷氏の論考によれば、明代では、最初官運が行われその行詰りの結果商運が採用されたと言われている。宋の場合はこうした議論や動きが殆んど見られず、四萬から五萬駄の茶は北宋後半を通じて官運で運ばれていた。なお、こまかいことではあるが茶の輸送路と關係する主要州縣の通判や知縣の任免には茶場司が關與した、茶遞鋪とは別に、興州長舉縣には裝卸庫、興元府西縣には轉般庫などの施設が設けられていた點をつけ加えておきたい。要するに茶遞鋪を軸とした官運法とその組織は權茶法の中期になって出現したと言つてよからう。

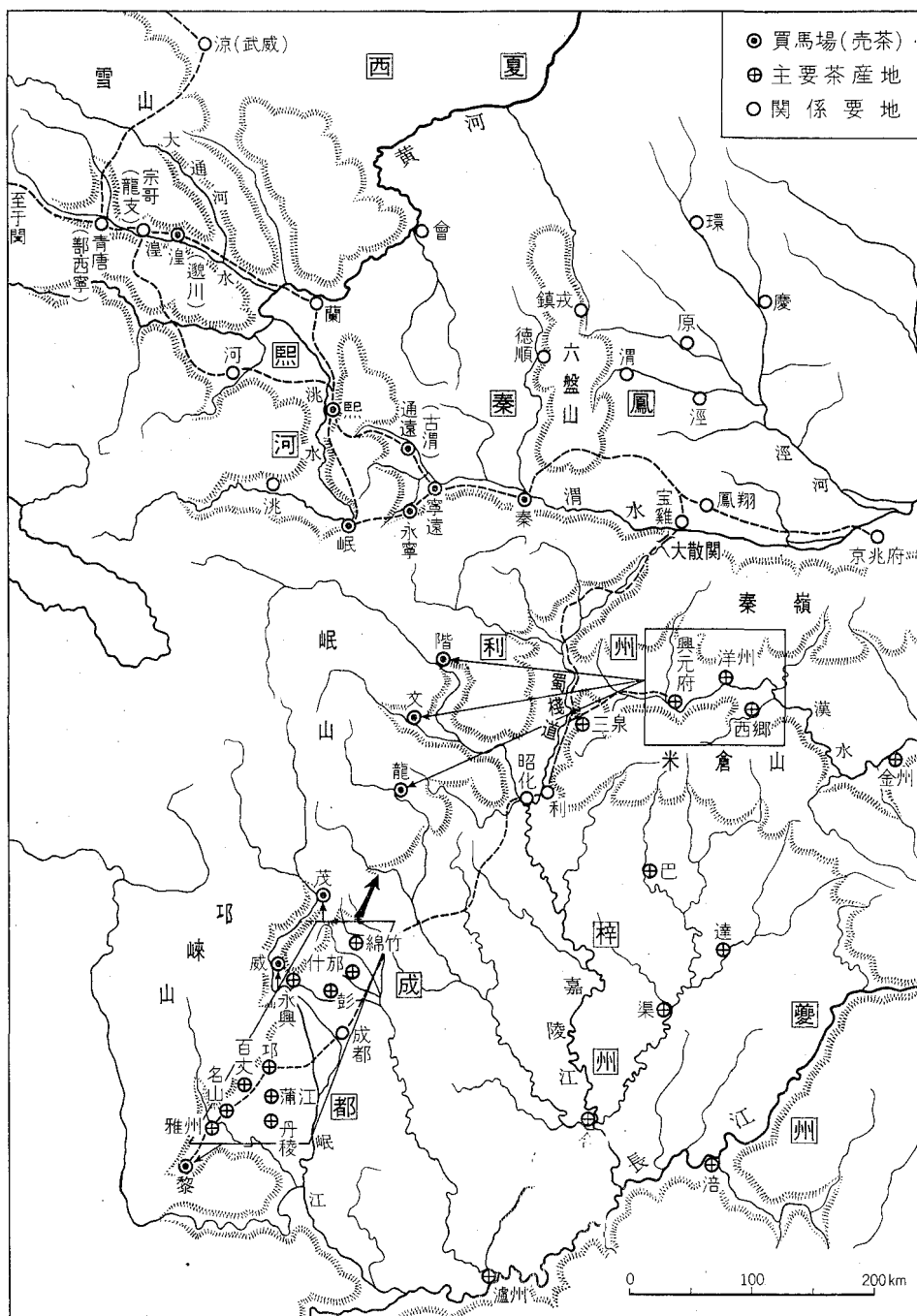
元豐以後定額化した四・五萬駄の茶は、四川の茶の全生産量からみると必ずしも大きな比重を占めていたとは言ひ難

い。元豐末期の呂陶の上奏では、「四川の茶は年産三千萬斤で生産者から適正買上げをした五百萬斤を熙河に入れるほかは、すべて商人によって販運される」と書かれている。⁹⁹この「商販」を河上氏は官搬と對比した商搬のように述べておられるが、若干説明不足のきらいがある。私見によれば、この五百萬斤（『五萬駄』が博馬（馬とのバーター取引）に用いられる茶であり、他の二千五百萬斤は、四川と陝西で、一般中國人や一部異民族に商人自身が、運搬・販賣する量に他ならぬ。時代により、特に秦鳳路などでは、商人は該地の官設賣茶場へ川茶を持って行って賣付けすることもあったから、官搬と言えぬことはないが、それは輸送の負擔を商人に肩代りさせるという手段ではないし、またそこへ運ばれる茶の量も、四川や陝西東部の通商茶とくらべると量は少なかったであろう。言葉をかえれば、この二千五百萬斤の茶を生産者から買茶場を通じて買上げ、それにマージンをつけて商人に賣り、更に流通過程で商税を徴集することによって、新法黨の目論んだ歳入増加が果されるわけであり、この點は博馬という問題と混同されてはならないと考える。私はこの時點では、商人が秦鳳と熙河の賣茶場へ、博馬乃至外國貿易の目的で茶を運搬納入する「商搬」は、殆んど重要性を持たなかったと思っている。

(2) 博馬茶の問題

西方邊境に官運された四萬駄の茶は、秦州・熙州・通遠軍・永寧寨（のち一部を河州に分割）・岷州の賣茶場に割當てられた。これら各場の熙寧十年の博馬及び支賣茶の實績は三萬四千駄弱であり、元豐元年には三萬六千五百駄に定額化された。¹⁰⁰この茶がどのようにして馬と交換されたのだろうか。從來、そうした點に立入って考察は加えられていないようであるから、少し詳しく調べてみたい。まず、秦鳳・熙河路の賣茶場と買馬場の關係を明らかにする必要がある。

西夏が陝西西北部を勢力圏に入れたのち、西邊に於ける買馬に携わったのは、樞密院（防衛廳）の一部局群牧司の系列に



連なる提舉陝西監牧買馬司と呼ぶ機關であつた。その下に秦州と原州・渭州・德順軍の四買馬場が設けられ、青唐族や秦鳳路の内屬蕃人から馬を買つていた⁽⁷⁾。王韶の熙河經營で西方の範圍が擴がると、西夏に近い三買馬場がやめられ、先にあげた秦州・熙州・通遠軍・永寧寨・岷州の五場に階州を加えた六買馬場が活動することになり、同時に統轄機關名も陝西が熙河に改められた。

ここで注意すべきは、榷茶博馬が開始される數年前の治平から熙寧初めにかけては、年間一萬七千頭の馬の代價として、三司から群牧司、買馬司という順に主として銀と絹が支出されていた點である⁽⁸⁾。治平三年までは、毎年、銀四萬兩、絹七萬五千匹が買馬に充當される規定であつたが、陝西地方に於ける銀の調達が可能になつたという理由で、中央からの銀は紬絹にふりかえられた⁽⁹⁾。熙寧三年の記錄によれば、計十萬匹の紬絹は、中央三司から四萬匹、成都・梓州・利州の四川三路から六萬匹と配分され、これに陝西の賣鹽錢なども加えられている。銀と紬絹に解鹽鈔が、榷茶法以前、馬の對價として用意された資金であつた。しかし、厄介なことに、これらの品はそのままの形で西方異民族に渡つたのではないらしい。西域諸國との國際的通貨である銀の問題はよく判らぬが、秦州周邊及び黃河上流一帶の青唐族たちが、契丹などのように絹織物を必要としたかどうか、後の史料からみても甚だ疑問である。また解鹽鈔という代物は、一種の手形で、買馬司を根城にそれを運用する蕃・漢の商人の存在を豫想しなければ、直接には馬の對價としての意味をなさない。憶測すれば、すでにこの時期に、四川の茶が商人によってある程度西邊に運ばれ、次に述べるカラクリによって異民族の間に入つて行つていたのである。王韶の熙河經營が進み、財政問題が緊急の課題となるに及んで、茶をできる限りストレートに馬の對價として持つて來るよう改革がなされたと考えて大過なからう。

階州を除く五買馬場とはじめにあげた五つの賣茶場は同一州軍に併存する。前からある買馬司のところへ新參の茶場司が乗りこみ、盾の裏表で一つの仕事をすることになると、繩張り争いのもめごとが起るのは當然の成行きだろう。

制度的に言えば、熙寧七年十一月には、四川の方は蒲宗閔に委ね、茶場司の直接責任者李杞が秦州にデスクを置き、更に翌年八月、「茶を賣ることと馬を買うことは一體であるから、提舉茶場が提舉買馬の職務を兼任すべし」と上奏して認可された。但し、この時は、茶場司は熙河路全體の財政を握る熙河路市易司に隸屬する形をとっていた。兩者が分離するのは次の李稷の時代、熙寧十年九月のことである。買馬司の運営に茶場司が關與して起るもめごとは、主として次の理由にもとづく。蕃族自身あるいは蕃漢の商人は、馬を携えて買馬場に賣りつけに來る。そこでは、銀と紬絹、主として後者が代價として支拂われるが、それをそのまま持つて歸る者は全體の二、三割程度で、あとは買馬場と同じ場所か若干離れた所にある賣茶場に持參して、ここで茶と交換する。樞密系列の買馬司に屬する買馬場では、通例、銅錢立ての馬の價格に相當する銀絹を支拂う時に、換算レートを普通より高く設定して利鞘をかせごうとするし、三司系の茶場司の茶場では、銀絹を市價にプラスした低い値段にしか換算せず、從つて結果的に高い茶を賣りつけられる。このからくりによって、蕃人は一匹の馬につき少なくて三貫、多いもので四貫以上の損をすることになる。息錢と稱されるこうした不當利潤は、年間六、七萬貫に達したと言われ、當然の結果として蕃人は馬を持つて來なくなり、持つて來てもその質を落してしまうし、他方、茶の滯貨も増加して行く。實際の運営上からみると、買馬司の方で、資金ぐりがうまくゆかない面があったらしく、馬の買付がはかどらず、茶場司手持ちの茶をストレートに馬價として提供するよう申し出て、認められている例もある。これは、後に四川名山茶が博馬專用に充てられる問題と關連するであろう。

茶場司と買馬司の關係を圓滑化する動きは、やや降つて元豐四年から本格的に現われる。その立役者は群牧司側から出て來た郭茂恂という男だった。彼もまた正史その他に傳のない人だが、三司勾當公事から群牧判官となり、その關係で陝西に派遣されて來た。間もなく買馬司と蕃人が交易する時、こちらの高壓的態度に相手方が怨みを抱き馬の輸入を阻害している事態の實情調査に乗り出し、そのまま買馬の問題に深入りして行つた。彼も科擧官僚とはいえ、實務に強く傾いて

いた人物と見受けられる。元豐四年の夏、彼が立案した改善案は、茶は馬と直接交換する、絹帛は熙河路の糧草購入の代價に振向ける、茶場司と買馬司を一體化する、の三點を骨子としていた。その細目は次の如くである。

(1) 馬一頭について茶一駄のバーター取引とする。價格の變動で不均衡が生じた時は、次のように處置する。① 馬が茶より高ければ、銀・絹・現錢などを添附する。前二者の換算レートは市價の通りとし、マージンをとらない。現錢の支拂いは、一頭の價格の一割以内に抑える。もし餘分も茶で欲しがれば茶を與える。② 茶が馬より高ければ、蕃部側が差額の錢を支拂うか、端數を合わせ、正數に直してから定量の茶を與え、あるいは端數の茶を與える。これらのため必要な一年分の現錢五萬貫は買馬司が準備する。

(2) 買馬場で馬の納入證を貰った蕃人は、すぐ賣茶場に赴いて茶を受取る。銀絹などは買馬場で直ちに支給し、手續上いろいろな面倒が起ることを防止する。

(3) 買馬賣茶の機關名は、提舉陝西買馬監牧兼同提舉成都府利州秦鳳熙河等路茶場司とする。

なお、この時の買馬額は、年間二萬頭と定められた。これらが許可されて數日後、雅州名山の茶を馬と直接交易に專用するべしとの詔勅が發布された⁽⁸⁸⁾。それ以前には、名山縣の茶とて、商人が買茶場で買って長引錢を納入し賣捌地を指定して販賣することが認められていたが、この後は「博馬」が最優先にされ、定額に達して餘った分だけについて雜賣が許される原則が作られたわけである。これ以後やかましく取上げられる名山茶とは、ではどんな代物だったろうか。

名山縣茶產地の中心、雅州蒙山に産する茶は、同時代の人范鎮の記述によれば、四川茶の最高峰に位し、雲霧に覆われるこの地で春遅く出る芽をつんで作り、白色、甘味、その性は溫暖と賞揚されている⁽⁸⁹⁾。常識で考えて、范鎮の言うような高級名品が異民族に大量に賣り渡されたとは考えにくい。「四川の茶にはいくつか種類があるが、西蕃人は名山茶のみを貴重視する」⁽⁹⁰⁾とか、「蕃部の欲しがるのは多くは名山の茶だ」⁽⁹¹⁾とは、茶法擔當者の常に口にする言葉であり、また「遠蕃は

名山茶を好み、悪い商人が粗悪な茶で騙そうとしても、識別能力がある」とも言われている。後にあげる黄廉は「名山茶は蘭州から邈川に入り、于闐まで達する」と書いている。蕃部の中で名山茶が茶の代名詞として使われ、珍重されたことは疑いない。しかし、翻って考えると、雅州名山一縣で、元豐の末に一萬二千駄（百二十萬斤）にのぼる良質の茶の出荷能力があったかどうかは、もう少し慎重に考慮しなければならぬ。黄廉はまた「漢人の飲む茶の色はわかかわかしく（嫩）、蕃人の飲む茶の色は黄色がかった（老）」とも言っている。軍事・財政上の必要から、名山茶の名聲を利用して一つのレツテルを貼り、ある程度の——中國人は別に飲まなくても良い——品質の茶を大量生産で作り、それを西蕃に流していたと考えられないだろうか。西蕃の部族長クラスともなれば、宋の宮廷から福建産の龍鳳茶や、江南の散茶を有難く貰って來ていたろうが、一般の西蕃人たちは、現今の番茶かそれに毛のはえた程度の茶を押しつけられ、半強制的とも言える形で飲茶の風習が擴がり、やがて宋側の思惑通りその嗜好が定着して、毎年一定量の茶の市場となった、というのが實情ではなかったかと私は想定する。南宋時代の史料に「以前、馬との交易にはすべて粗茶を使っていた。乾道年間（一一七三—一一八八）はじめて細茶を用いた。」と書かれているところから考えても、名山茶は單なるレツテルであつたと思えてならない。

秦鳳・熙河に官運する四萬駄の茶の中には、名山茶より以上に多く、關中産の茶も含まれていた。宋側で、四川に於ける博馬用の茶の生産地を制限したことは、茶場の管理、運搬、商人對策など、各方面の便宜を考慮しての施策であつた點を指摘しておきたい。

西邊に官運された茶四萬駄が、すべて馬との交易に當てられたかどうかについても一瞥せねばなるまい。さきにあげた各買馬場所所在地に送られる割當茶駄は、博馬と支賣の二項目に分けられている。この支賣とは何であろうか。當時、乳香や麝香をはじめ西方から齎らされる物資が、どれ位茶と交換されていたかは判然としない。支賣茶の中に、そうした貿易の對價としての部分が含まれていたかも知れぬが、よく多くは、熙河路に於いて消費する糧食の買付に使われていたので

はなからうか。

既に觸れたが、熙河路財用司がとりしきるこの方面の軍費・糧食の調達は、王韶の目算では、熙寧七年以後少なくとも三年たてば、現地の商税、鹽税や酒税でまかなえる筈であつた。⁽¹⁰⁰⁾しかし現實には、租税収入は皆無、各地の倉庫はカラッポであり、⁽¹⁰¹⁾思惑を秘めて動く商人達は政府の思うままにならず、⁽¹⁰²⁾熙寧八年の冬には、熙州、河州及びその周辺の城寨の糧食の缺乏は極點に達した。熙寧四年に本格的な熙河經營が開始されて以來、年間約四百萬貫が支出される一方、⁽¹⁰³⁾歳入の方は、やや經營が軌道に乗った元豐初めの時期でさえ、錢糧の絶對値合計が四十萬から七十萬貫石という微弱な數であつた。⁽¹⁰⁴⁾從つて四川から運んだ茶を直接又は間接にその費用の一部に充てることは是非必要であつた。ここで問題となるのは、先にあげた李杞の四十萬貫の熙河路へ交付する茶利と四萬駄の關係である。熙寧七年、大藏大臣章惇の上奏に「茶の商税と息錢の中から、毎年四十萬貫を認定して、博馬ならびに糧草買入れのために熙河に渡す。」⁽¹⁰⁵⁾という發言が見える。それが必ずしも現金でなかつたことは、李杞が「物帛を買つて熙河に送る」⁽¹⁰⁶⁾と言っているところから明らかである。私はこの四十萬貫は李杞と蒲宗閔によつて行われはじめた四萬駄の官運分とは別個のもので、四川の茶場司から、熙河路の轉運司もしくは邊防財用司や直接送達されていた費目と考へておく。長編には元豐七年、熙河路に與えられる年間二百萬貫の内譯が載っているが、⁽¹⁰⁷⁾この中に提舉權茶司が熙河路で歳收する息錢と經制司に納める茶の折剩錢（換算の時の剩餘錢）計六十萬貫という項目がある。⁽¹⁰⁸⁾これは熙寧七年以後の四十萬貫と一つの線の上で考へてもよいものでなからうか。

(3) 川茶の市場

次に、蒲宗閔がうちだした他の二つの問題を纏めてとりあげよう。

四川内部での茶の消費と川茶を陝西市場に送る問題は、これまでやや等閑に付されていた嫌いがある。上述の如く、年

間産額の%が消費される場所やそれに關係する事柄について、いまだ少し丁寧に調べる必要がある。

北宋の榷茶法で問題になる四川の茶は、くり返し述べたように、成都南部山地と關中一帯を産地とするものである。むろん、これら以外の地域にも茶は作られていた。早い時期に、長江に沿った達州や涪州の茶の扱いが問題になっているし、¹⁰⁸遅れては渠州や合州とか瀘州などの産茶地もあげられている。¹⁰⁹また關中の南の分水嶺を境にした巴州も、元豐五年に榷茶地分に加えられたことが知られる。¹¹⁰しかし、これら地域の茶は、夔州路のように、その路内で消費されるか、梓州路のように産地の州内での販賣に限定されており、大きな生産量と市場を持つものではなかった。成都と關中の茶はそれと異り、前者は主として成都路と梓州・夔州路、後者は利州路と一部梓州路に販路を伸ばしていた。川茶と呼ぶ場合は、主としてこの二地域の産茶を指し、川峽食茶と言われる時は、四川四路で飲用される商販茶を意味するのである。この地域で茶を販賣する商人は、成都、關中の生産地に設けられた茶場（生産者むけの名は買茶場、商人むけには賣茶場）に赴き、時價に従って政府へ一割の息錢を加えて茶を買付け、全體の價格の一割の長引錢（販賣地域・日限その他を指定した許可及び商稅納入證）を拂ってから卸・小賣りに出掛ける。

問題は「鳳州と鳳翔府・永興軍・環慶路の州縣は以前のように通商地分とし、商人が四川の茶場で茶を買って歸ることを許す」という規定である。榷茶法實施以後、陝西の茶法は二つの地域に分けて考えねばならぬ。二つの地域とは東部の永興軍路と、西部の秦鳳（無河）路であるが、實際の便宜上、鳳翔府及び鳳州などの秦鳳路東境地帯は、永興軍路と同じ扱いを受けていた。この二つの地域に同じ政策が行われたか違う政策が行われたかが時によって異なる。大まかに言えば、永興軍路には川茶以外の南茶も入り、通商路分としての色彩が強かったのに對し、秦鳳以西は大體川茶の統制區域であった。この時の蒲宗閔の提言は劉佐によって行なわれた陝西東部に於ける解鹽と川茶の官賣をやめ、この地域の川茶を再び自由販賣にしたものに他ならない。ところがこの計畫が果して何時までどの程度實施されたかがよく判らない。少なくとも、

元豐六年四月には、永興軍路には四川の茶は入っていなかったように見受けられる史料があり、この時以後、川茶の販賣地域とすることが認められているからである。

話はそれるが、漢中の洋州と境を接し行政的には京西南路に属する金州でも、この頃かなりの茶が生産されはじめていた。この茶は最初は川茶の範疇に入っていなかったため、漢水を少し下った地點から北上し、商州上津縣をへて秦嶺を横切り、關中に運んで賣捌かれていた。⁽¹¹⁾ 元豐六年四月以前には、永興軍路では、この金州茶を中心に、四川のヤミ茶や、南方の夾雜物の多い末茶（水磨茶）を飲用したが、値段が高く、人々に不便を與えていた。そこで、「四川の茶をひろく陝西の各地に運んで賣り出し、その法規は秦鳳路禁茶地分の條制によるべし」という提案がなされ、裁可されている。それとともに、金州産の茶も、全面的に川茶権法の枠内に組みこまれ、三あるいは六と言われる買茶場で年間六〇七十萬貫の利益⁽¹²⁾をあげるようになった。

話を元に戻そう。秦鳳・熙河路では、熙寧七年の權茶法開始と同時に、商人が川茶をこの地方の賣茶場に運び賣りこむシステムが行なわれた。この時以降、秦鳳・熙河は制限付販賣區域となつたとみられる。四川茶法に關する限り、當時の史料ではこうした區域を「禁地」と呼んで「通商地分」と區別している。禁地では、茶場司管下の賣茶場からすべての食用茶が消費者に賣り出されるのが原則で、商人が自由に茶を販賣することはできない。元來陝西では、江南地方の茶が商販されて來たことは先にも觸れた。しかし、異民族への賣渡しを軸に、秦鳳・熙河で茶の官賣がはじまると、當然この地域で商人が自由に南茶を賣ることはできなくなる筈である。暫らく過渡期を経たであろう後、元豐元年五月、南茶が熙河・涇原・秦鳳路に入れば、臘茶を私販したのと同じ重い罰を與えるという勅令が出され、⁽¹³⁾ 陝西西部は完全に川茶の禁地となつてしまった。恐らく北宋を終るまで、秦鳳（東部の數縣を除く）と熙河に於けるこの體制は變らぬといえようが、陝西東部はそうは簡單にゆかぬ。

元豐六年四月、陝西東部に川茶が入るようになって數ヶ月後の閏六月公布された茶法條貫には、「陝府西路はなべて官茶（官營賣茶場で賣られる茶）の禁地とする。各地の商人が、川茶・南茶・臘茶及びヤミの種々の茶を販賣して禁地を侵犯すれば、民間の密告・捕縛を許し、すべて、臘茶の密賣の法規によって處分する」と明記されている。これが行われると、商人、とりわけ陝西と四川間の遠隔地商人の活動は著しく制限されてしまう。それはとも角、元豐の半ば以後、陝西全域が川茶の禁地ときめられ、それに伴って、各地に數多くの賣茶場が設けられた。『宋史』食貨志に、元豐八年當時、陝西に三百三十二の賣茶場があったといっているのがそれに當る。この大部分は、私は、陝西の各州縣及び市鎮や堡寨などに置かれた、漢民族の消費のための賣茶場であつたと考える。この頃の陝西全域の商稅務を數えると、二百六十程度である。賣茶場は稅場の設けられているような場所にはすべて設けられていたろうから、それ以外を加えて三百三十という數は安當な線に行くであろう。

永興軍路の茶法は、元豐の末になつて搖ぎはじめた。元豐八年二月、福建の轉運副使であつた王子京の上奏で、京師と陝西は茶が通商になつたという記事が現われる。¹¹⁷ここで言う茶は、王子京の動きを辿ると福建の臘茶のみを指していることが判るが、臘茶が陝西に通商で入つて來ると川茶との摩擦は避けられない。一方陝西の官賣自體にも蘇轍が糾弾するやうな弊害が出て來た。すなわち、「陝西の民間で飲用する茶の量は決まっている。茶を扱う役人は成績を上げることのみで、多く運びこみすぎて賣り盡せず、どの州も割當額に達しない。そこで毎斤の値段をあげ、人々に割當賣りをする。元豐八年、鳳州では茶官の命令で一斤ごとに百錢を添加した。茶法が行われた當初は、秦鳳・熙河だけが賣茶地分（禁地）だったのに、今は陝西東部に至り、臘茶の地分を侵奪し、その損失の多いこと間違いない。」¹¹⁸と言つのがそれである。

哲宗の元祐はじめ、舊法黨が勢力を持つと、四川茶の總責任者として派遣された黃廉は、まず、陝西東部の茶法を改めた。熙河・秦鳳・涇原路は異民族との問題があるため禁茶舊路とし、永興・鄜延・環慶は通茶新路とする。前者は官がと

りしきり、後者は商人に販賣させる。茶價維持のため南茶の流入を禁止しようという提案がなされ、⁽¹²⁰⁾元祐二年（一〇八七）その實施をみた。ところが新法黨が返り咲くと、紹聖二年四月再び陝西全域が禁茶地分とされ、綱運形式で成都と漢中の茶が運ばれるに至る。⁽¹²¹⁾哲宗に續く徽宗の時代も、永興軍路の茶法は目まぐるしく變る。まず崇寧二年八月、程之邵は、「永興・鄜延・環慶・涇原路は以前、南茶を飲用していた。川茶を権賣してから、密賣で法禁を犯す者が多い。いま、もし商人に南茶を販賣させられれば、誠に結構であろう」と上奏し、皇帝が裁可している。⁽¹²²⁾この史料では、「商販通入南茶」という表現が使われ、或いは川茶のところに一緒に南茶を入れる意味かともとれる。しかし、翌年十月には、川茶は陝西南茶地分を通じて出賣してはならぬという記事が見えるから、⁽¹²³⁾南茶流入と同時に陝西東部の川茶の禁地扱いは中止されたのであろう。

それから七年を経た政和元年、またもや永興軍等四路を川茶禁地にする提案がなされ、翌年よりその實施が認められた。⁽¹²⁴⁾それも東の間の翌二年八月、蔡京の東南茶法の條制で、これら四路が「客販南茶地分」と規定され、川茶は、少なくとも陝西東部では禁地官賣として扱われなくなってしまう。⁽¹²⁵⁾こうした経過を便宜上表にすると次頁のようになる。しばしば陝西の茶法が變る一つの理由に、四川の茶の滯貨という問題もあり、政和はじめには七萬五千駄、價格にして四百萬貫の食茶が倉庫に残っていたと言われる。⁽¹²⁶⁾しかし、より根本的には、南茶を陝西に運んで儲けようとする東方の商人、川茶を扱う陝西や四川の商人、そして少しでも利潤をあげて點數を稼ごうとする茶場司の官吏が、それぞれ複雑に絡み合い、その時その時の法規の改正に係つたと思われる。

なお、つけ加えれば、禁地へ運ばれる茶は、最初は商般が行われたようだが、少くとも紹聖以後の史料では、人民を顧役するか、或いは茶遞鋪によって官般していたことが知られるのである。⁽¹²⁷⁾

蒲宗閔と李稷のコンビの下で、元豐前半期の四川の茶法は著實に進展して行った。李稷が就任して一年の間に、その利

	熙河・秦鳳路	永興軍路	関係者
熙寧 7. 10	自由販賣 賣茶場へ商人納入 (禁地)	自由販賣 商販	李 杞
9. 4			
10. 5		解鹽と交換で政府販賣 商販(息錢と長引錢徴收)	劉 佐 蒲 宗 閔
元豐 1. 5	南茶の流入禁止		
	(完全に川茶禁地)	(このあたりで川茶流入禁止か)	
		金州茶等商販流入	
6. 4	禁茶地分(川茶)	禁茶地分(川茶)	陸 師 閔
8. 2		臘茶の通商許可	王 子 京
元祐 2. 3	禁茶地分(川茶)	通商販賣(川茶) (南茶流入の禁止)	黄 廉
紹聖 2. 4	禁茶地分(川茶)	禁茶地分(川茶)	陸 師 閔
元符			
建中靖國			
崇寧 2. 8	禁茶地分(川茶)	南茶商販	程 之 邵
大觀			
政和 1. 8		鳳翔以東川茶禁地	
2. 8		鳳翔以東南茶商販	蔡 京

益を合計すると七十六萬貫と言われ、少なくとも數字だけから見ると、彼の功勞は高く評價された。⁽¹²⁸⁾それと並行して、提舉茶場司の發言力は強まる一方であった。まず、就任當初、李稷は茶場司の職務上の問題に他司が容喙せぬよう釘をさし、⁽¹²⁹⁾監司に相當する地位を確保したのち、都提舉市易司の管轄下を離れ、直接三司に屬する形を作りあげた。⁽¹³⁰⁾茶場司内部の官制や、産茶や茶の搬運と關係する州縣を統轄する體制もかたまり、やがて元豐二年には、茶場司専用の詔勅の編纂が始まった。⁽¹³¹⁾一連の改革の成功によって、李稷は間もなく陝西の轉運使に榮轉したが、なお茶場司の統帥をも兼ね、このため自己の任地に近い秦州に提舉茶場司を移している。⁽¹³²⁾李稷は昔で言えば酷吏傳にも入れるべき人物だったらしく、當時の人からは「寧逢黑殺、莫逢稷察（燒き殺される方が李稷と李察よりもまし）」と謠われたが、⁽¹³³⁾元豐五年九月（一〇八二）、西夏との對戰中、永樂城に於いて亂兵のため非業の最後をとげた。⁽¹³⁴⁾彼に代って元豐の後半、茶場司の實權を握ったのが陸師閔である。陸師閔の時代、四川の權茶法は、完成期に達し、その制度は、哲宗以後四十年間の規範と意識されるに至る。

三 權茶法の完成

(1) 陸師閔の時代

宋代四川の權茶法で重要な役割を演じた陸師閔は、恩蔭出身である。彼の父陸誥は杭州の餘杭の人であったが、晩年は四川で活躍し、熙寧元年（一〇六八）五十九歳で歿した。⁽¹³⁵⁾師閔はこのため、その成長期を四川で過し、この地方の實情に精通していた可能性が強い。宋代の經濟政策の現場擔當者の中にはこうした恩蔭出身者がかなりの數を占めるように思われる。彼らは、その活動する現地と密接な繋りを持つ場合が少なくない。茶法關係の官員に四川出身者が多いことは、これまでの敘述から容易に首肯されよう。こうした人たちは、つまり科擧に優秀な成績で合格し、出世コースを歩むエリート官

僚ではなく、胥吏とは一疇を劃すると言え、萬年地方廻りの科舉出身者、そして恩蔭出身グループなどが重層をなし、それが實際の政治を動かす上に、大きな役割を果たしていた點は、今後追求して良い課題であろう。それはともかく、陸師閔は熙寧の末年、李稷の推輓によって成都路茶場司の幹當公事官に任命された。⁽¹³⁶⁾

茶場司の官制は、熙寧から元豐にかけて整備されて行ったが、その主要なものは、長官の都提舉以下、提舉、同提舉（最初は主管・同主管といい、のちに管勾・同管勾ということもある）、管幹文字、幹當（勾當）公事と呼ばれた。一番制度がはっきりする徽宗時代には、都大提舉茶馬司は秦州と成都に廳舎を置き、都提舉、提舉、同提舉が合計二、四人、管幹文字と幹當公事は優等から一・二・三等の四ランクに分れ、各等一、三名が就任していたが、幹當公事の數の方が多い。⁽¹³⁷⁾ 前者が書類を扱うデスク・ワークだったのに對し、後者は外に出て動きまわる仕事を受持ったためであろう。提舉官の任期は必ずしも二乃至三年が守られてはおらず、むしろ同一人が長く同じポストを占める傾向が強かった。これに對し、幹當勾事には主として選人が充てられ、四川は二年、陝西は二年半の任期で、かなり頻繁に交代していた。ただ彼らは、提舉官の辟召によって採用されるケースが多く、「茶場司は四川土人を勝手に辟召する」という苦情もあがっている。現場に近くなれば近くなる程、方言や地方の實情に精通している問題などが重要な要素として入って来るであろう。このような下級官員の土着的側面も改めて考えることにしたい。

さて、幹當公事のポストについた陸師閔は三年後の元豐三年に同提舉に拔擢され、⁽¹³⁸⁾ 陝西の李稷を補佐しつつ、蒲宗閔の次席として、成都茶場司を動かした。李稷の歿後暫らくは、史料にあらわれる限り、蒲・陸ともに肩書きは同提舉である。前章で詳述したように、元豐四年になると、陝西買馬司の郭茂恂が強い働きかけを始め、四川茶場司はどちらかと言えば受身の立場に置かれた。しかし、この間に陸師閔の地歩が確立したことは疑いなく、元豐六年閏六月、北宋四川權茶法の集大成ともいうべき「茶法通用條貫」三十八條ができた時には、茶場司の代表者として名を現わし、遅くともその年

十一月には都大提擧の椅子を獲得した。

陸師閔の活躍が表立って眼につくようになった元豐六年は、四川榷茶法の完成期と言って良い。李杞、劉佐、李稷、そして彼らの下で、茶場司の舞臺廻しをつとめた蒲宗閔らによって紆餘曲折を経ながら着實に進展して來た榷茶法は、ここに「茶法通用條貫」として三十八條の大綱にまとめあげられた¹⁴⁹。この中には、これまで述べて來た四川・陝西に於ける川茶の販賣規定——くり返えせば、成都西部と關中及び金州の產茶地に官營の買茶場を設け、全部の茶を生産者から買上げる。買上げた茶の一部は秦鳳・熙河に送り、西蕃との馬の交易に充て、他の一部はマージンと商税をとり商人に卸して四川で賣らせる。陝西には別に茶を輸送し、官設の賣茶場で市販する、というもの——をはじめ、茶の生産者への資本貸付その他諸問題、買賣茶場における牙人や胥吏などの任用規定、茶を陝西地方へ運搬するためのとりきめ、あるいは茶場司官員の義務や賞罰、そして、それらすべてに亘る違反の際の罰則が網羅されている。この後、榷茶法が問題になるときま¹⁵⁰って「元豐の舊法による」といった意味の表現がなされるように、この條貫は四川茶法の基本原則とも呼び得る法規であった。

それとは別に、同じ年の四月、陸師閔は、注目すべき改革を斷行している。それは成都府に於ける都茶場の創設に他ならぬ¹⁵¹。都茶場という呼稱は、蔡京の通商茶法が實施された政和以降特によく使われ、南宋などでは榷貨務・都茶場と併出するが、その淵源は四川のこれあたりに求められよう。此の時の都茶場は要するに官營の川茶卸賣センターとでもいうべき機關であった。陸師閔は設置の趣旨を、「成都府は水陸交通の要衝で、茶商が多い。しかし、いつも物貨が留滞するため、資本のある者に安く買い叩かれざるを得ない。成都府に博賣都茶場を作り、適宜値を上げて賣り出し、また種々の物貨を物々交換して回轉流通させ、その利潤は、四川で茶を賣ったり、陝西で交易したりする規定に従って處分しよう」と説明している。この文章だけでは、意味が明確に掴めないが、都茶場に反對する蘇轍の言葉を参考に敷衍してみると大凡

次のようになる。⁽¹⁴⁴⁾ 成都に茶を買いに来る商人は、現金でなく物貨を携えて来るが、それがうまくはけけないで、資金のある者に安く買い叩かれてしまう。そこで政府が、商人の欲しがる茶と持って来た物貨を適当な価格でバーター取引し、物貨は政府の方で利輸をとって別に處分する。これは王安石の市易法の趣旨そのものである。それかあらぬか、元祐の初め、舊法黨の劉摯や蘇轍は異口同音に都茶場を非難攻撃している。「都茶場の胥吏や仲買人は、無理矢理に人々に商品を持って來させ、安く買って高く賣り、市易法よりも弊害は甚しい。また、茶の買付資金を使って高利貸をやる。」とは蘇轍の言葉であり、「これまでは産茶州縣に出掛けていた茶を求める商人が、成都都茶場の高い茶を買われ、おまけに從來の買付地から成都までの運搬費をも拂わされる」⁽¹⁴⁵⁾とは劉摯の言葉である。

陸師閔は李稷の年平均八十五萬貫を遙かに凌駕する百萬貫、あるいはそれ以上の利潤をあげたと言われるが、そのためには随分無理をしたらしく、四川の買茶場の數をとってみても、元豐八年には、三年の二十九から四十一と大幅にはね上っている。⁽¹⁴⁶⁾ 彼の反對者たちの攻勢も、大商人の利益代表という立場だけのものとは必ずしも言いきれない。

(2) 元祐以後の茶法

元豐八年三月（一〇八五）、三十八歳の若さで神宗が崩御すると、宣仁太后の庇護のもと、司馬光を中心とした舊法黨が息を吹き返し、政權の座についたことは周知の通りである。右司諫の蘇轍、侍御史の劉摯、そして多分蘇轍の蔭武者であった殿中侍御史の呂陶ら、口の達者な言官連は、ここをせんと蜀茶禁權の弊害と通商法の復活を叫んだ。かくて元祐改元の二月、戸部郎中の黃廉が成都に行つて茶法の利害を調査することになった。⁽¹⁴⁸⁾ 調査とは名目で權茶を改めようという彼の派遣に對し、當時まだ中央に残っていた新法黨の領袖、知樞密院事の章惇が、「茶法は決して改めてはいけけない。富商大賈の輿論に耳を貸してはいけけない」⁽¹⁴⁹⁾と言っているのは、やはり注意しておくべきだろう。ちなみに、黃廉は江西の洪州

分寧縣の出身、王安石に認められ、その推舉は受けたが新法には必ずしも賛成でなかったらしく、神宗時代は地方へ出ており、元祐になって中央に戻った男である。¹⁵⁰

榷茶法撤廢論の蘇轍は、次のようなソロバン勘定を持ち出して来る。「自由販賣にすれば、茶の販賣税と長引錢、そして商人の活動の結果轉がりこむ茶税、雜稅錢、酒の賣上税で七〇八十萬貫はかたい。また茶遞鋪の廢止によって兵隊の衣糧や取締り官吏の費用三〇四十萬貫がうくことになる（この合計百二十萬貫は内輪の見積りで實際はもっと多くなるであろう）。陸師関は二百萬の利益というが、あらゆる理不盡をやり、人民を苦しめてやると八十萬貫を得るにすぎぬ。こんなことなら茶法をやめてしまう方がマシである。」¹⁵¹

しかし、政府にとっては、たとえ心情的には蘇轍に加擔したくとも、そんな机上計算より、現實の収益の魅力を捨てることはできない相談であった。舊法黨系とは言え、現實を見つめる能力を備える黃廉は、その邊の呼吸をのみこんでいたとみえ、四川の茶法を、あの募役法の場合のように前後の見境もなく元に戻すようなことはせず、現狀に多少の手心を加えた折衷案で、文字通りお茶をにがしてしまった。

黃廉は、理屈から言えば全部自由販賣にすることが望ましいが、現實を考えるとそうもゆかぬと前置きした後、四川では現在インフレで物資が流通せず、また輸送設備が十分でない。俄に自由販賣にすれば商人は來ず、却って生産地で茶が滞り、生産者は苦しむ。また、もし蕃人との交易に支障をきたすと大問題である、と述べ、三項の改革案を示した。それは、¹⁵²

- (1) 熙河・秦鳳・涇原三路はこれまで通り、政府が適正價格で生産者から買取り、それを運搬して官賣場で賣る。
- (2) 四川と關中は自由販賣區域とし、南茶は陝西に入らぬようにする。
- (3) 博馬額は年間一萬八千頭とする。¹⁵³

これに對して蘇轍は不滿の意を表明したが、結局、翌二年三月、黃廉の提案は實行に移された。¹⁵⁴ただ蘇轍の上奏で明ら

かになる一つの問題點は、買茶場を存續し、生産者支配を行うのは、雅州名山と梁（興元府）、洋州の三處に限られていること⁽¹⁵⁶⁾で、これは四川内の茶の生産地に、官買統制地域と、商人が生産者と直接取引できる地域が併存する新しい状況が生れたことを意味する。

これより先、元祐元年六月、陸師閔は從七品の承議郎から正八品の奉議郎に降等されるとともに、主管東嶽廟という祠祿の名目官をつけて放逐され⁽¹⁵⁷⁾、黃廉本人が都大提舉權茶買馬監牧公事に就任した⁽¹⁵⁸⁾。そして八月には、成都の在城博賣都茶場も閉鎖され⁽¹⁵⁹⁾、一方、既に陸師閔時代、利州路の轉運副使に移されていた蒲宗閔も、これまでの責任を負って罷免された⁽¹⁶⁰⁾。蒲宗閔の消息は以後つかむことができない。

こうして始まった元祐舊法黨時代の四川の茶法がどのように推移して行ったかを語ってくれる史料は意外に少ない。八年に及ぶ元祐の長い治世の間、他の時期と比較して異常なほど四川茶法の記録が残っていないことはやはり氣になる現象である。あるいは何かの理由によって、この時代の史料が、意識的に抹殺されたことも十分豫想される。ともあれ、黃廉は、一年のちに左司郎中に轉じて中央に歸り、彼の下にいた閤令なる人物がその地位についたようであるが詳細は不明である。その後、元祐六年十二月になると、やはり四川眉州眉山本貫でこれまた恩蔭出身の程之邵が都大管勾成都府利州路茶事として登場している⁽¹⁶²⁾。彼は以前、成都の募役法に關與し、また各地の鹽政に盡力したが、新法・舊法の間を巧みに泳ぐ人間であつたような印象を受ける⁽¹⁶³⁾。彼らの下で、四川茶法がどのように展開したかは判然とせぬが、一つ、博馬茶について問題が起つてゐることが指摘できる。

茶場司と買馬司の關係は一旦は調整されたかに見えたが、内實は並行あるいは分離の底流が依然として存在していた。毎年の利益の數字をふやすことのみに腐心し、またその數字の實績ゆえに勢力を持つ茶場司の方が、どちらかと言うと買馬司を壓迫し、そのため肝腎の買馬に支障をきたしがちであつた。紹聖のはじめ、「茶司は自分たちの賣上成績をあげる

ことのみに汲々とし、國馬のことを考えない。茶の値段を釣り上げては馬司の持つ錢鈔正帛と交換し（馬司はその茶を蕃人の馬と交換する形となるであろう）そこでまた利を稼ぐ。」という聲があがっている。⁽¹⁶⁴⁾この時茶場司の長官に歸り咲いていた陸師閔も、茶の値段が上がることに、買馬司の錢物を侵害することを認めている。⁽¹⁶⁵⁾つまり、元祐から紹聖初めの時期には、茶場司の利益のために買馬は明らかに二次的に扱われ出しているのである。當時、茶場司の歳入は極めて多かった。それは生産地茶場に於ける二割のマージンをはじめ、四川・陝西での商販による商稅收入に大部分を負っていたことであろう。従ってみずみず利潤の多い販賣茶の價格とそうかけ離れた値段を博馬茶にだけつけるわけにも行くまい。買馬場の立場にたつと、ただでさえ良馬が少ないのに、一層馬の買入れが困難になるわけだが、この趨勢はとどまるどころか、逆に進んで行くように思われる。たとえば元符三年（一一〇〇）年の程之邵の言では「最近の蕃部は、馬を持って來ないで、水銀・麝香・毛皮製品と引換えに茶を持って行く」という有様である。その主たる理由として彼は、公的機關（恐らく茶場司以外の役所）や商人たちが、名山茶を買って蕃部に與え雜貨と交換し、それによって利益を得る。茶はこうしたいわば密貿易で西蕃に流入し、手續上問題が多く、値段の引合わぬ馬は持って來ないといった趣旨のことをあげている。⁽¹⁶⁷⁾この事態が更に進むと、「大觀年間以後は茶馬貿易政策はダメになった。四川茶は馬と交換されず、珠玉とのみ取引される」という少し極端な記事まで現われる狀況になる。⁽¹⁶⁸⁾

要するに、茶場司による茶價の恣意的な吊上げや、西方貿易によって巨利を博そうとする官僚や商人たちのため、正規の茶馬貿易は元祐以後次第に形骸化の方向を辿って行った。馬の數の辻褄さえあっていれば、質の問題は二の次にされ、まして國防上本當に必要な戰馬を獲得することは不可能という買馬場の有様では、北宋末の宋軍の弱體化も無理のないところであろう。

哲宗の親政によって紹聖と年號が改まり、新法黨が再び陽の目をみるようになったその六月、陸師閔がまたも成都に姿

を現わした。紹聖元年十月、陝西路は再び禁茶地分に變更され、茶遞鋪が整備されるのを待つて、官が生産者より收買した川茶を運んで賣ることが決められた。⁽¹⁶⁾ただ、この段階では、まだ元豐六年の榷茶成法にすべてが戻されたわけではなく、四川内部の生産者と買茶場の關係は、元祐時代の半榷半不榷といった形が存續し、大勢として元豐に歸る方向であったと言えよう。やがて、紹聖四年二月に至つて利州路（漢中）⁽¹⁷⁾が、ついで四月、成都府路の產茶州縣にすべて禁榷法が復活されるに至る。⁽¹⁸⁾そして最後には、元符元年九月、成都府で博賣都茶場が再建され、形の上では四川の茶法は、ほぼ元豐の昔に戻されてしまった。これ以後、徽宗の時代を通じて、川茶榷法は、部分的にはいろいろな問題を惹起し、條例の追加や改訂が行なわれるが、常に元豐六年の陸師閔の茶法條貫を念頭において運營されて行つたと考えて大過なからう。

おわりに

最初にも斷つたように、この小稿では、北宋後半の四川榷茶法の展開を、周圍の情勢を睨みながら、時代順に筋を通して跡づけることに主たる目標を置いた。また、内容的には、四川茶の生産面の分析は、河上氏が力を注いでおられるため全く觸れず、意識して流通・販賣の側面を明らかにしたつもりである。これまで述べて來た諸制度、ならびに茶法の推移をふまえつつ、若干結論めいたものを書き列ねておきたい。

北宋の四川茶法には大別して二つの側面があった。一つは四川茶法の論者が看板として掲げる、西方異民族の馬の對價としての役割である。榷茶以前には、必ずしも馬の代價として使われていなかった川茶が、博馬に必須の品として登場する裏には、西夏との戦い以來の中央財政の窮迫といった要因が潛んでいたことであろう。西方異民族に渡されるべき銀や絹帛の一部分にくいこみ、やがてそれらにとって代つたと思われる川茶は、北宋後半、年間四〇五百萬斤が甘肅・青海に

流出し、一萬五千頭前後の青海馬と交換される制度として定着した。彼我の事情によって、この關係に變動があり、次第に崩壊に向うにせよ、これが四川茶法と密接に繋がっていることは否定できない。

二つに、より強く四川權茶法を推進繼續させた理由として、國家財政、とりわけ皇帝直轄の財源として、茶場司のあける利潤が重要な役割を持っていたことが挙げられる。

たびたびふれたように、四川内部と陝西に販路を持つ川茶は、産地の限定や交通の未發達などの條件に規制され、大資本を持つ商人集團にその利益を獨占される傾向が強かった。新法黨の指導者王安石は、東南で行なわれた權茶法には猛反對であった。東南茶の專賣は、國都開封を根城とする大商人によって、その利を壟斷されていたからである。嘉祐四年（一〇五九）の通商法實施は、彼の考える方向に沿った改革であった。⁽¹⁷⁾ところが、名前は同じ權茶法でも、彼の宰相時代の終り、四川に於いて始まった專賣法は、逆にこれまでの通商法で巨利を博していた大商人の活動を制限するものと言える。あちらは權茶から通商へ、こちらは通商から權茶へと、字面通りとるならば矛盾のようにみえるが、權茶の内容が異なるのであり、この本質に於ける矛盾はないと言って良い。ところで河上氏は、東南茶法の目的と四川茶法の目的は異り、また前者では商人の活躍し得る面が大きいのに反し、後者では小さいと述べられ、兩者の差を先進と後進の經濟事情に求めておられる。しかし私は氏の御高説には賛意を表しかねる。夔州や梓州路の山嶽峽谷地帯はいざ知らず、例えば成都平野が後進地で、商人の活動が小さかつたらうか。唐の中期以後、多くの貴族たちが流れこみ、五代から宋代と高い文化を開花させたこの地が經濟的に後進地であつたとみるのは問題であらう。私は成都府路と梓州の北西部、漢中、關中を含む商圏乃至經濟網はそんなに小さいものとは考えない。それらを握っている商人達の横暴を、茶をキイにして政府が抑え、國庫收入を増大させようという意圖が、四川權茶法の本意ではなかったのだろうか。權茶法が整備されるにつれ、生産者に對するしめつけ強化、流通過程に於ける弊害などが生じ、また茶場司もノルマ増加ばかりで苛政に走りがちとなる。一方、必

ずしも財政豊富でなくなつて來た元豐中期以後の皇帝權力にとつて、年間百萬貫以上の利潤は重要な金蔓である。「茶場司から毎年納める百萬貫の息錢は、指定官廳に交付する定まった額以外は、陝西などに貯えて詔用を待つ⁽¹⁷⁴⁾」という記事をはじめ、茶場司の息錢の朝廷封樁を暗示する史料が幾つかある。これから考えると、當初の豪商を抑える意圖は次第に薄れ、專賣統制の枠をはめて生産者や消費者を犠牲にし、その上に立つて皇帝直屬の財源を豊かにしようという色彩が濃くなつて行くようである。他方、巨商たちは榷茶法に反對しつつも、適當に自分達の商賣の抜け道を見つけ、利益を確保して行つたに違いない。徽宗の崇寧二年以降、王厚・童貫らは、熱心に熙河經營に従事するが、その背後には、皇帝―蔡京集團―大商人グループといった、軍事行動に乗じて大きく儲けようとする集團の暗躍が想定され、⁽¹⁷⁵⁾ 彼らは當然四川の茶法とも密接に結びついていたのである。國家財政の危急——とりわけ王韶の熙河路經營を助ける——を救い、大商人の專横を抑えることを目的として開始された四川榷茶法は、その意圖を否應なしに變えて行つたのである。

北宋後半五十年に亘る四川榷茶法は南宋に入ると間もなく、趙開によって改められる。秦嶺の線で金との境界が設定され、陝西に於ける市場や、西蕃との博馬貿易に於いて大きな影響を被るようになった南宋時代、四川の茶法も當然變化せざるを得ない。建炎二年十一月(一一二八)、趙開は、官が買賣茶場を通じて生産者を支配することをやめ、政和二年(一一二二)蔡京が東南地方で實施し、以後の定法となつた給引通商法(條件付自由貿易)を採用した。⁽¹⁷⁶⁾ こうして四川の茶法は新しい局面を迎えるが、その問題はまた稿を改めて論ずることにしたい。

注

引用文獻のうち、長編は李燾の續資治通鑑長編(浙江書局本)、會要は徐松の宋會要輯稿(北平圖書館影印本)、資料は佐伯富編の宋代茶法研究資料(東方文化研究所 一九四一)のそれぞれ省略である。なお原史料の字句で偽誤と思われるものはその下にへんで訂正し、脱落は()で字句を入

れ、解釋は改訂によって行つた。

- (1) 梅原郁「宋代茶法の一考察」『史林』五五ノ一・一九七二
- (2) 松井等「宋代の茶法茶馬」『東亞經濟研究』一ノ二・一九一七、別に講演要旨として佐伯富「宋代四川の茶法」『東洋史研究』二ノ二・一九三六)がある。

- (3) 河上光二「宋代四川に於ける榷茶法の開始」(『東方學』第二十三輯・一九六二)、「宋代四川の榷茶法」(『史學雜誌』七二ノ一一・一九六二)。
- (4) 谷光隆『明代馬政の研究』(『東洋史研究叢刊』二六、東洋史研究會・一九七二)。
- (5) 宋會要・長編・宋史などの基本史料からとりあえず茶法關係を中心に北宋時代二十五例の川峽・川陝の用例をとり出して調べてみた。川峽とだけ斷定するのは無理な用法は徽宗の崇寧年間までは見當らず、それまでの十九例は、たとえ川陝とあつても川峽と直して説明のつくものばかりだった。二十五例一つ一つを提示することは省くが、二主要なものをあげておこう。四川茶法で最も基本的史料の元豐六年閏六月十三日(會要食貨三〇ノ一八)の茶法通用條貫の第一條に次のような規定がある。一、諸成都府・利州路・金州產茶處、各就近置場、等(盡)數買園戶茶、許各(客)人於官場收買、販入川陝四路并金州界、都民間食用、私販買賣博易興販、及入陝西地分者、並許人告捕、依犯私臘茶法施行。この規定の川陝四路を四川四路ととるか、四川と陝西の四路ととるかでは大きな違いが出て來る。ところが同じ條貫の第十八條には、川陝四路轉運司差官例、という表現が見える。川陝四路を官制上特別扱いにした例は、會要職官六六ノ一四、元豐四年六月一日條の「川峽差遣」や、東坡奏議卷五の「薦何宗元十議狀」の「川峽四路員缺」によって明らかであるから、第十八條も當然川峽が正しかろう。そうすれば、第一條が川陝四路、第十八條が川峽四路と、同じ條貫で紛らわしい二つの表現が並存するのは不自然である。一方事實の面からみても、第一條の上が川陝であり乍ら下にわざわざ、陝西地分に入る者への罰則がついているのは矛盾する。いま一つ、長編三八一、元祐元年六月甲寅の黃廉の上奏中に、「川陝四路及關中諸路」とか、「其發至陝西六路者、爲綱茶、榷於川陝四路者爲食茶」という記述がみえる。この川峽が兩方とも川陝でないところの上奏の意味が通じなくなってしまうことは言を俟たないであらう。
- (6) 宋代の路の變遷については、張家駒の「宋代分路考」(『禹貢半月刊』四ノ一、一九三五)が一應の參考になる。
- (7) 榷一雄「王韶の熙河經略に就いて」(『蒙古學報』一、一九四〇)。
- (8) 會要職官四三ノ四七、自熙寧七年四月。差太子中舍・三司幹當公事李杞、著作佐郎梓慶路察訪司准備差遣蒲宗閔、相度成都府易務(下略)。なお會要・食貨三七ノ一八にはこの年正月二十四日に、李杞にすでに成都に市易司を置く可否を調べさせている記事が見える。
- (9) 會要食貨三七ノ一八、熙寧七年二月二十九日。都提舉市易司言、近遣試將作監主簿劉默、相度置市易務於成都府路、乞借三司銀十萬、買茶、從之。
- (10) 桑原隲藏『蒲壽庚の事蹟』(第三章「廣州居留の蒲姓」、岩波書店『桑原隲藏全集』第五卷)。
- (11) 宋史三二八、蒲宗孟傳。蒲宗孟字傳正、閩州新井人、第進士、(中略)常日盥漱、有小洗面・大洗面・小濯足・大濯足・小大濯浴之別、每用婢子數人、一浴至湯五斛。
- (12) 例えば會要職官四三ノ四七、熙寧七年九月十六日條の肩書。
- (13) 會要職官四三ノ四八、熙寧七年十月十四日。太子中舍・三司幹當公事・經畫成都府利州路茶貨李杞等奏、與成都府路轉運司、同共相度、到於雅州名山縣・蜀州永康縣・邛州在城等處、置場買茶、般往秦鳳路照河路、出賣博馬。十一月二日、又奏、准朝旨、於本路出產茶州軍、相度計置買茶、津般、往熙河秦鳳路出賣。勘會、洋州・集州・興元府、出產茶貨、內集州近已廢罷、本處產茶不多、難以置場收買外、有興元府・洋州廣產茶貨、自來通商興販、乞與轉運司、同共相度、於興元府・洋州、置場收買、津般、往熙河秦鳳路出賣、從之。
- (14) 會要食貨四三ノ四八、熙寧七年十一月三日。詔、李杞・蒲宗閔並專令提舉買茶等事、更不幹三司職事、李杞於秦州、蒲宗閔於成都府、踏逐空閑僻宇、居住、杞與提點刑獄序官、宗閔與提舉常平倉序官。なお會要職官四三ノ四七參照。提舉や同提舉の待遇については、會要職官四三ノ五二、元豐二年五月十三日條や、同四三ノ六五、元豐六年十一月

九日條などに記載がある。

- (15) 會要職官四三ノ四八、熙寧七年十一月十二日。權發遣三司使公事章惇奏(中略)今來、初擬置茶場、官中本息錢數有限、慮恐熙河路輒有侵使、乞於茶稅息錢內、每年認定四十萬貫、應副熙河、博(博)馬并糴買糧草、餘外錢物、並本司椿實、從之。

- (16) 欒城集卷三十六、論蜀茶五害狀。(前略)臣聞、五代之際、孟氏竊據蜀土、國用偏狹、始有種茶之法、及藝祖平蜀之後、放罷一切橫斂、茶遂無禁、民間便之、其後淳化之間、牟利之臣、始議搭取、大盜王小波・李順、因販茶失職、窮爲剽劫、凶餓一扇、兩蜀之民、肝腦塗地、久而後定、自後、朝廷始因民間販賣、量行取稅、所取雖不甚多、而商賈流行、爲利自廣(下略)。

- (17) 會要職官四三ノ四七、熙寧七年七月八日。同食貨三六ノ三二、元豐五年五月二十一日。蘇轍の前注の奏議など。なお、河上氏が宋代の巴州を重慶とされ、夔州路の茶產地として議論を展開しておられるのは不注意による誤まりである。宋の巴州は米倉山脈の南側に位置し、行政的には利州路に属し、重慶とは全く關係ない。

- (18) 後述注(18)参照。

- (19) 會要食貨五五ノ三九、熙寧九年四月二十二日。體量成都府等茶場利害劉佐(佐)言、詢究商賈及牙店人、久來通販射利本末、自來陝西客人、興販解鹽入川、却買川茶、於陝西州軍貨賣、往還獲利最厚(下略)。及び呂陶、淨德集卷三、三次論爭權買川茶不便狀の第六項、蘇轍、欒城集卷三十六の蜀茶五害の第三項など。

- (20) 會要職官四三ノ七九、崇寧三年二月二十九日。戶部狀、提舉陝西等路買馬監牧司申、黎州所買馬、類多不堪披帶、自來止爲羈縻遠人(中略)自黎州至鳳翔府汧陽監四十八程、沿路倒死數目不少、其馬多充雜支(中略)黎州歲買馬二(二)千匹、元符二年買五千二百八十餘匹、元符三年買四千一百餘匹、費用茶萬數浩瀚(中略)欲乞黎州買馬、且依元條、收買三千匹(下略)。

- (21) 曾我部靜雄「宋代の馬政」(『東北大學文學部研究年報』十、一九六

青唐の馬と四川の茶

○

- (22) 會要兵二ノ四、嘉祐五年九月。薛向言(中略)每蕃漢商人・聚馬五七十四至百匹、謂之一發、每匹至場、支錢一千、逐程給以芻粟、首領續食至京師禮賓院、又給十五日并犒設酒食之費、方詣估馬司、估所直、以支度支錢帛、又有朝辭分物・錦襖子・銀腰帶、以所得價錢市物、給公憑、免沿路征稅、直至出界(下略)。

- (23) 宋史一九八、兵志。(前略)邊州置場、市蕃漢馬、團綱、遣殿侍、部送赴關、或就配諸軍、曰省馬(下略)。

- (24) 會要食貨三〇ノ一一、熙寧八年二月三日。都大提舉熙河路買馬司奏、據提舉熙河路市易司狀、申准都大提舉買馬司割子、坐準熙寧七年七月十六日中書割子內、聖旨指揮施行內一項節文、客人興販川茶、入秦鳳等路、貨賣者、並令出產州縣、出給長引指定、只得於熙・秦州・通遠軍及永寧寨茶場、中賣入官、今來已有客人興販茶貨、到岷州茶場中賣(中略)今欲依所乞、熙寧七年九月八日中書割子、於熙字下、寨字上、添入紙字、從之。

- (25) 宋史一九八、兵志。(前略)於是、中書・樞密院言、河南北十二監、起熙寧二年至五年、歲出馬一千六百四十四、可給騎兵者二百六十四、餘僅足配郵傳(下略)。

- (26) 會要兵二四、馬政雜錄。曾我部注(21)論文、藤枝晃「李繼遷の興起と東西交通」(『羽田碩壽論叢』一九五〇)などを参照。會要兵二四ノ三には、凡馬所出、以府州爲最、蓋生於黃河之中洲・日子河汊者、有善種、出環慶者次之。とみえる。

- (27) 中島敏「西羌族をめぐる宋夏の抗爭」(『歴史學研究』一ノ四、一九三四)。

- (28) 會要蕃夷六參照。

- (29) 宋史一六七、職官志。都大提舉茶馬司の來注。元符末、程之邵召對、徵宗詢以馬政、之邵言、戎俗食肉飲酪、故貴茶、而病於難得(下略)。會要食貨四三ノ七五、建中靖國元年四月三日。戶部狀、茶事司奏。蕃戎性嗜名山茶、日不可闕(下略)。

- (30)

- (31) 會要食貨四三ノ四七、熙寧七年六月二十五日。熙河路經畧使王韶言、奉詔、募買馬、今黑城夷人、頗以良馬至邊、乞指揮買馬司、速應付、從之。
- (32) 宋史一八四、食貨志。
- (33) 續資治通鑑長編紀事本末、卷二二九、收復湟州の崇寧二年六月戊辰條。
- (34) 谷光隆『明代馬政の研究』第一篇第二章。
- (35) 楊希堯『青海風土記』(南京・新亞細亞學會、民國二十二年)五六頁、H. Epstein: Domestic Animals of China (Commonwealth Agricultural Bureaux, London, 1969) pp. 94~112 などを参照。
- (36) 長編二七一ノ二、熙寧八年十二月庚寅。太子中舍・提舉成都路茶場兼熙河路市易司・同提舉買馬李杞、管勾鳳翔府太平宮、杞以疾自陳也。
- (37) 長編二七四ノ十、熙寧九年四月、體量成都府等路茶場利害劉佐言(中略)仍以佐、提舉成都府利州秦鳳熙河等路茶場・兼熙河路市易司、尋又以佐兼提舉買馬。
- (38) 宋史一四八、食貨志には都官郎中劉佐とある。
- (39) 長編、注(37)の中略の部分。(前略)商人販解鹽入川、買茶至陝西、獲利甚厚、欲依商人例、歲以鹽十萬席、易茶六萬駄、約用本錢二百一萬緡、比商賈取利、皆酌中之數、禁商人私販、從之。
- (40) 會要職官四三ノ五〇、元豐元年四月七日。(前略)往時、劉佐定熙河名山茶、每馳直三十七貫省(下略)。
- (41) 會要食貨二四ノ一〇、熙寧九年七月二十五日。知洋州文同奏、臣竊見、本州買賣茶貨、行之日久、至今其間、措置尚未循理、近又準朝旨、盡行榷鹽、不許私商興販、官自置場出賣、然則計其所得之息、實爲深厚、要施行久遠・使之通流・不能成弊者、猶有餘議、本州管內三縣版籍、有主客凡四萬八千餘戶、此舊數也、其實比之今日、財へ才へ付六七萬、大率戶爲五口、亡慮二十四萬餘口、口凡食鹽二錢、日費鹽三千餘斤、往時、茶鄉人戶、既得各自取便賣茶、於是陝西諸州客族、無間老少、往來道路、交錯如織、擔負鹽貨入山、并在州縣村鄉鎮市、坐家變易、當此之時、鹽有餘戾、今既一切禁止客人、不令販賣(下略)。
- (42) 會要食貨二四ノ一一、熙寧九年十一月二十七日。侍御史周尹言、伏見、成都府路州縣、戶口蕃息、所產之鹽、食常不足、梓潼等路、產鹽雖多、人常有餘、自來取便販賣、官私兩利、別無姦弊、訪聞、昨成都府路轉運司、爲出賣陵井場鹽、遂止絕東川鹽、不放入本路貨賣、及將本路卓筒井、盡行閉塞、因閉井而失業者、不下千百家、蓋鹽價增長、令人戶願買陵井場鹽、又因言利臣僚奏請、募人販解鹽、往川中貨賣、自陝西至成都府、經隔二千里以來、山路險阻、不能般運到彼、致日近成都府路鹽價・湧貴每斤二百五十文足、更值豐歲、以二斗米、只換一斤鹽、貧下之家、尤爲不易、東川路鹽、每斤却只七十(中略)。況兩川州郡、雖分四路、其實一體、本無鹽禁、未有捨東川隣路之近・不通行鹽價・却於解池數千里外・般往成都出賣(下略)。
- (43) 長編二八一ノ八、熙寧十年四月甲申。詔、罷茶場司官賣解鹽。なお、解鹽の問題はこれでケリがついたわけではない。長編三三四ノ一三、元豐六年四月戊申には、又言、本司昨奏、依客例、買鹽入川變轉、每年不得過一萬席、準朝旨、不得令州縣出賣・及有抑配(下略)とか、同三四〇ノ一二、元豐六年十月癸巳に、師閔又言、運鹽入蜀、見計置萬三千席、約賣盡得二分五釐之息などと言う記事があり、陸師閔の茶息の一部は、その利潤で補われていたことが推測される。
- (44) 會要食貨三〇ノ一三、熙寧九年十一月六日。(前略)今來、彭州壩口・蒲村・導江・至德山、綿州龍安、漢州綿竹・楊村等處、係利州以西州縣、嘉州洪雅縣、眉州丹稜縣、並係產茶貨去處、緣新法內開說不盡、欲乞應成都府諸州縣產茶地分、並依切蜀等州買茶稅場條例、差逐處稅務收買、並依新法施行、從之。
- (45) 四川の產茶地に設けられた買茶場を年代別に表示すると次のようになる。元豐の終りには全部で四十一あったというが、そのすべての名を知ることはできない。

眉	熙寧七年	熙寧八年	熙寧九年	熙寧十年	元豐年間
蜀		永康	味江 青城	丹稜	
彭	邛口		導江 蒲村 木頭	永昌	
綿			彰明 龍安	什邡 綿竹	
漢					
嘉			洪雅 楊村		
邛	在城 火井 大邑 思安				
雅		名山	在城 百丈	廬山 榮經	
興元		油麻	在城 城固		
洋		在城 斯多店 西鄉			
文		在城			

*宋會要食貨二十九と元豐九域志による

(46) 欒城集卷三十六、論蜀茶五害狀。(前略) 近歲李杞(杞)初立茶法、

一切禁止民間私買、然猶所收之息、止以四十萬貫爲額、供億熙河、至劉佐・蒲宗閔提舉茶事、取息太重、立法太嚴、遠人始病(下略)。

(47) 會要食貨三六ノ三一、熙寧十年九月十六日。(前略) 先是(周)尹上言、成都府路、置場、權買諸州茶、盡以入官、最爲公私之害、初李杞倡行敝法、奪民利未甚多、故爲患稍淺、及劉佐攘代其任、增息錢至

青唐の馬と四川の茶

倍、無他方術、惟割剝於下、而人不聊生(下略)。

(48) 呂陶、淨德集卷一、「奏具置場買茶・旋行出賣・遠方不便狀」(熙寧十年三月八日)、同「奏爲茶園戶暗折三分價錢、令客旅納官充息・乞檢會前奏・早賜改更事狀」(熙寧十年三月十八日)、同「奏爲官場買茶・虧損園戶・致有詞訴喧鬧事情」(熙寧十年四月二十四日)。

(49) 前注の淨德集、熙寧十年三月十八日の奏議にその經緯が詳しく述べられている。

(50) 前注の淨德集、熙寧十年四月の奏議。

(51) 長編二八二ノ一五、熙寧十年五月庚午。(前略) (呂)陶累奏未報、而邛口茶園三百餘戶凡五千人、齎茶赴場、監官以本錢支盡、續于茶場司關請、未至、會雨作、不即秤收、衆積忿恚、遂徑陞廳事、圍繞監官、欲令牙人先出錢與買、監官起避之、衆隨詬詈、或毆擊從者、或褫裂監官衣袖、牙人等皆散去(下略)。

(52) 長編二八二ノ十三、熙寧十年五月庚午。詔、川中茶場、今後不得虧損官私、其取淨利三分指揮、更不施行。

(53) 長編二八二ノ十二、熙寧十年五月庚午。同提舉成都府等路茶場公事蒲宗閔言、本司般賣解鹽、已蒙改法、依舊通商外、有茶法事亦相關、須至更改、每年欲起發茶四萬駄、赴秦州熙河路、依市價賣、仍認定稅息錢、應副博馬羅買糧草、并川峽路民閒食茶、許逐場・依市價・添減收買、每貫收息錢一分出賣、仍沿貫納長引錢、鳳州・鳳翔・永興軍・環慶路州軍、亦依舊爲通商地分、許客人于川中茶場、算請與販(下略)。

(54) 長編二八三ノ九、熙寧十年七月壬子、詔提舉成都府等路茶場・都官郎中劉佐、知彭州・屯田員外郎呂陶、並衝替、令轉運司劾罪、佐坐買茶措置乖方、陶不即聽受邛口茶園戶訟也。

(55) 長編二八三ノ十、熙寧十年七月甲寅。國子博士李稷、提舉成都府等路茶場・熙河路市易事、代劉佐也。李稷の傳は宋史三三四にみえる。

(56) 駄は馳に作る場合も多い。欒城集卷三十六の蜀茶五害の狀に、般運四駄、計四百斤餘とある。

(57) 會要食貨三〇ノ一五、元豐元年五月十九日。提舉茶場司言、歲運官茶

四萬駄饋邊、常患糴送不繼、欲以本司頭子錢、置百料船三十隻、差撥舟兵士六十人・軍大將一人、管押、歲終比較、如年課辦、比陸運省便、即計所贏、以十之三、賞軍大將等、有損壞遺闕、以賞錢請受備償、從之。

(58) 會要職官四三ノ五二、元豐元年九月十六日、李復又奏、已降指揮、般茶鋪、令提舉茶場司、選三班使臣一員、具名奏差、今運到三班奉職楊廣、乞差充巡轄秦鳳與利販茶鋪、填報置闕、從之。

(59) 會要食貨三〇ノ二七、紹聖元年十月二十九日、陸師閔又奏、近因本司奏請、增置巡轄茶鋪使臣、減罷催綱官、臣愚以謂、巡轄使臣・固不可無、而催綱官往來點檢、取責收附、尤爲要切、今欲乞、見管催發綱運官一員・并巡轄茶遞鋪使臣四員、任滿日、依舊許本司奏舉（下略）

(60) 會要職官四三ノ七六、建中靖國元年九月十七日、茶事司狀、今相度、綿州羅江・巴西縣界八茶鋪、令巡轄綿州利州界茶鋪使臣、移赴綿州、置麻宇、巡轄雅州成都府路茶鋪使臣、兼催發黎州博馬茶綱、所有逐官稱呼寔闕、一員、以巡轄綿州羅江至利州昭化縣界茶鋪呼、於綿州、置麻宇、一員、以巡轄漢州成興府至邛雅州界茶鋪・兼催發黎州博馬茶綱呼、依舊只於成都府置麻宇、委是地理職事均賞、從之。

(61) 長編三二六ノ十六、元豐五年五月丙午、同提舉成都府第（等）路茶場蒲宗閔乞、自秦州至熙州、量地理遠近險易、置事（？）車子鋪二十八、招刺兵士、從之。

(62) 般茶鋪の軍人に對するこまかい法規は會要食貨三〇ノ二四、元豐七年十一月二十二日の條にあげられている。

(63) 淨德集卷三、三次論爭權買川茶不便之狀。（前略）一、川路險阻、般茶至陝西、極難、始元豐初、撥成都路兵士數百人、貼補般運、不二年、死亡逃竄幾盡、茶司遂令和雇人夫、同共般載、州縣長其勢力、或和雇不行、則差稅戶往前（前往）、頗有賂費、洋州一處、因差夫般茶、最爲騷擾。會要食貨三〇ノ一八以下にのせる元豐六年閏六月の茶法通用條貫の、二一から二四までは、一般人戸を雇傭して茶の運搬に充てる規定である。二一條では、諸願脚州縣、召有力行止人、充甲頭、準

例收冠保引錢、應所保脚戶、帶官物脚錢等逃匿、及有所欺隱侵盜、致失陷者、甲頭備償、即例外剋取、依倉法、州縣輒役使、杖二百、計庸、重者自從重。と甲頭を軸にする一種の請負制をしき、その下の脚戶については、二十二條で、請水陸般茶鹽所經州縣、並推排脚戶、置簿籍、定姓名、準備、隨時價和雇、如有損失毀敗、全數備償。と規定している。この時點では、茶遞鋪官運の弊害のためこうした和雇制が中心になっていたかと思われる。ただこれの方が、むしろ種々の問題を起し、その一端は、長編三四〇ノ十三、元豐六年十月庚子條に、利州路提點刑獄司言、茶場司運茶入諸場、所歷郡縣、多不依法和雇脚乘、本司訪問、知利興州實會截客人驟綱雇發、其興州更藉定四等以上人戶、般運興化府洋州等處、除應募人外、亦如興州兩處、並曾支雇錢、請處見各如此施行、詔茶場司改正、仍根究不當處、行遣。によつても窺われる。

(64) 欒城集卷三十六、論蜀茶五害狀。（前略）元豐之初、始以成都府路廂軍數百人、貼鋪般運、不二年、死亡略盡、茶官遂令州縣、和雇人夫、和雇不行、即差稅戶、其爲搔擾、不可勝言（注略）、後遂添置遞鋪、十五里輒立一鋪、招兵五十人、起屋六十間、（中略）、今已置百餘鋪矣、若二百鋪皆成則是添兵萬人、（中略）、又茶遞一人、日般四駄、計四百餘斤、回車却載解鹽、往還山行六十里（下略）。

(65) 前注の續きに、至去年八月九月間、劍州劍陽一鋪人、全然走盡、沿路號茶鋪、爲納命場。とある。

(66) 谷光隆、前掲書。

(67) 會要職官四三ノ五三、元豐四年五月十二日。陝西府（府西）路轉運使・都大提舉茶場李稷言、臣典領茶法五年、選辟官屬、同心一力、奉宣條詔、令（今）所差諸州官、罷滿及期、乞本司・自今奏罷雅州・漢州知州、叩・彭・利州通判、名山・永康・綿谷・順政知縣、所貴維持法度、久益不懈、詔、如轄下官弛慢、令茶場司、奏易劾罪、以聞。また會要職官四三ノ一〇〇、宣和三年四月二十四日を參照。

(68) 會要職官四三ノ九四、政和三年八月十三日。（前略）臣又嘗建議、乞

將發茶場庫監官縣令、如成都府排岸司・興州長舉縣裝卸庫・興元府西縣轉般庫監官、綿州巴西・利州昭化・三泉・興州順政・長舉・興元府南鄭・西縣知縣、計十處、每撥發茶及四百駄、無闕失、與減二年磨勘、(下略)。

(69) 淨德集卷三、奏乞罷權名山等三處茶狀。(前略) 又況蜀茶歲約三千萬斤(原注、元豐七年二千九百一十四萬七千斤、八年二千九百五十四萬八千斤、除和買五百萬斤、入熙河外、尙有二十五萬斤、皆屬商販、流轉三千里之內(下略))。

(70) 會要食貨四三ノ五〇、元豐元年四月七日の條。河州への分割は長編二九四ノ七、元豐元年十一月丙戌の條を參照。

(71) 宋の早い時期から設けられていた秦州買馬場を除き、原州・渭州・德順軍の三買馬場制が確立したのは、西夏興起後の嘉祐五年八月であつた。會要兵二二ノ四參照。

(72) 長編二五九ノ七、熙寧八年正月乙巳。詔、熙河路六處、置場買馬、罷原・渭州・德順軍買馬場。

(73) それ以前、華向の時代は解鹽取引だけの時もあつた。會要兵二二ノ四、嘉祐五年九月。(前略) 請於原渭二州德順軍、舉選使臣、專買馬、以解鹽取引、召募蕃商、廣收良馬、不支度支錢帛(下略)。これで見ると華向は西夏族と同じように青唐族の經濟狀態を考えていたのだなにかと思われる。

(74) 會要兵二二ノ六、治平三年七月二十一日。群牧司言、據陝西提舉買馬監牧司言、每年元定買馬銀四萬兩、絹七萬五千匹、內銀本路自有坑冶、興發銀貨已多、更不支撥外、欲乞下三司、一就免那細絹、每年從京畿支撥一十萬匹、差使臣、管押遞鋪般運、赴陝府下卸、應副買馬支用、詔令三司、於每年合支撥銀絹內、只支細絹共一十萬匹、充買馬支用、仍支撥堪充軍裝紬絹、責令易爲變轉、其四萬兩更不支(下略)。

(75) 會要兵二二ノ七、熙寧三年十二月二十七日。(前略) 令三司・歲支紬絹四萬匹、與成都府梓州利州三路・見支紬絹六萬匹、共十萬匹、與陝西寶贖錢、相兼買馬(下略)。

青唐の馬と四川の茶

(76) 注(14)參照。

(77) 會要職官四三ノ四九、熙寧八年八月二十三日。(前略) 李杞言、賣茶博馬乃是一事、乞同提舉買馬、(中略)、詔、杞兼提舉買馬(下略)。

(78) 會要職官四三ノ四九、熙寧八年閏四月二十六日。中書門下言、提舉熙河路市易司申明、與提舉成都府利州秦鳳熙河等路茶場司、有無統轄、勘會、成都府買茶、於熙河路博馬、元係都提舉市易司舉畫、昨差李杞、蒲宗閔、前去相度、遂就差提舉買茶、即是熙河路市易司一事、今相度、其茶場司合併入熙河路市易司、爲買茶稅場、李杞、蒲宗閔合兼提舉熙河路市易司、仍各依舊分頭幹當、並隸都提舉市易司統轄、從之。

(79) 會要職官四三ノ五〇、熙寧十年九月四日。詔、提舉成都府利州秦鳳熙河等路茶場司、更不隸都提舉市易司、亦罷兼秦鳳路市易司。

(80) 會要職官四三ノ五三、元豐四年七月九日。奉議郎・權發遣羣牧判官公事郭茂恒(中略)奏(中略)、臣於本路體訪得、蕃部所欲、大抵惟茶爲急、自來將馬中官、請到折價銀絹等、只是將三二分歸蕃、其餘往往却赴茶場、博買茶貨、其買馬司所支銀絹等、又例各折價高大、茶場却只依市價、量添些少錢數博買、其鈔亦隨事各有虧損、約計一匹馬價、虧蕃部錢、多者至四貫以上、少者亦三貫以上、是以不如所欲、致買數不多、及少肯將好馬入塞(下略)。

(81) 會要職官四三ノ六七、元豐七年十二月十一日。兵部奏、陝西買馬司、自熙寧十年・差官買馬・歲一萬五千匹爲額、至元豐三年、每歲常買及數、其時馬價、聽用茶并雜物、從蕃部所便、相兼折還、唯茶依市價外、其雜物・各有量增息錢、歲收六七萬貫(下略)。

(82) 會要職官四三ノ五〇、熙寧九年四月二十三日。都提舉熙河路買馬司言、監牧司闕乏、見欠市易司錢物、而市易司欲俟還足、方肯應副買馬、遞相推倚、實誤博馬日用、欲乞馬價盡用茶折之(下略)。

(83) 長編二九八ノ一七、元豐二年六月己未、同三一〇ノ八、同三年十二月庚申の條。

二三九

一塗、可令郭成茂恂體量以聞。

(85) 會要職官四三ノ五三、元豐四年七月九日。(前略・郭茂恂) 謹具逐項

措置、經久可以施行、畫一如後、一、蕃部將馬中官、其價錢並以茶充折、約計・每馬一匹、支茶一馳、如馬價高・茶價少、即將餘數、以銀細絹及見錢貼支、內銀細絹・並依逐處在市見賣實價・紐折、不得有虧官私、其見錢・仍計每匹價直、不得過十分之一、如不願請銀絹等、只願以餘數・等請零茶、亦聽從便、如馬價少・茶價高、即許貼錢請茶、或合併就整請領、或據錢數・等請零茶。貼黃稱、以上件馬價、若支一分見錢、每年約用五萬餘貫、提舉買馬司逐年有收到雜支租課內贓等錢・約六萬餘貫、可以應副支用。

(86) 前注の續き、一、蕃部牽馬赴場、候揀中、據合請茶數、限當日、出給關子、赴場請茶、畫時支給、所有願貼請銀細絹及見錢等、只就買馬場、亦限當日支給、已上如稍稽滯、干繫官吏、並從嚴斷。

(87) 前注の後條、一、以提舉陝西買馬監牧兼同提舉成都府利州秦鳳熙河等路茶場司、爲名。

(88) 會要職官四三ノ五六、元豐四年七月十二日。詔、雅州名山茶・今〈令〉專用博馬、候年額馬數足、方許雜賣。

(89) 會要食貨三〇ノ一二、熙寧八年四月十九日。提舉成都府等路茶場司言、雅州名山縣・發往秦熙州等處茶、乞聽官場盡買、不許商販、詔、商人就官場買者、聽之、每駄納長引錢、令指定州軍貨易。

(90) 范鎮、東齋記事卷四、蜀之產茶凡八處、雅州之蒙頂(中略)、然蒙頂爲最佳也、其生最晚、常在春夏之交、其芽長一寸許、其色白、味甘美、而其性溫暖、非他茶之比、(中略)、李景初與予書言、方茶之生、雲霧覆其上、若有神物護持之(下略)。

(91) 會要職官四三ノ九一、大觀二年十月七日。詔、川茶有數品、惟雅州名山茶、爲羌人貴重(下略)。

(92) 會要職官四三ノ五六、元豐四年八月二十一日。(前略)今蕃部所欲茶、大抵多欲名山一色(下略)。

(93) 會要職官四三ノ九四、政和三年八月十三日。(前略)遠蕃多嗜名山茶、

閉有姦商・詭用綱茶・蠱硬食茶・罔之者、亦能區別(下略)。

(94) 長編三八ノ一二、元祐元年六月甲寅。(前略)雅州之名山、自蘭州入邈川、至于闕(下略)。

(95) 會要職官四三ノ六六、元豐六年十二月十二日。(前略)臣愚見・竊謂・可令逐季首、椿定名山茶馳、春秋各三千、各〈冬〉加一千、夏減一千。この合計は一萬二千駄である。

(96) 前揭注(94)の中で、茶色不等、蓋漢茶色嫩、著茶色老とあり、これは漢著で生産する茶でなく消費する茶を言ったものと思われる。

(97) 建炎以來朝野雜記、甲集卷十四、蜀茶の條。(前略)舊博馬皆以粗茶、乾道末、趙彥博爲提舉、始以細茶遺之(下略)。

(98) 會要職官四三ノ八七、崇寧五年六月二十三日。(前略)元豐中立法、雅州名山茶、專用博馬、候年終・馬數足、方許雜賣、自建中靖國元年後來、爲買馬數多、名山茶數少、以興元府萬春・瑞金・大竹・洋州四色綱茶、相兼應副博馬、僅良足辦(下略)。

(99) 前揭注(70)参照。

(100) 長編二五四ノ四、熙寧七年六月丁丑。熙河路經略使王韶言、熙河二州、最爲聚兵之地、歲支人糧馬豆三十二萬斛・草八十萬束、本路有市易、於茶鹽酒稅、可以應辦宜(？)糴、乞差官二人、乘賤計置、其草豆、別乞差四人、專領、並立數辦賞格、并乞鹽鈔三二十萬、候三年外、本司自辦、從之。また同二五四ノ十、同月甲午も参照。

(101) 長編二七一ノ三、熙寧八年十二月庚寅。權發遣熙河路經略司高遵裕言、本路新復、未有租稅之助、而所在倉廩空虛、商人絕迹、轉運司計置不行、乞權停買馬、以川茶付轉運司、變錢、計置獨束、上批、熙河二州、及外城寨糧食、缺乏已極、萬一別有事變、於邊計、所繫不輕(下略)。

(102) 長編二七一ノ十三、寧熙八年十二月己酉。商人王震等言、熙河路入中糴糧、多是聞官舉人、及四方浮浪之人結羅、有經年方輸到、或以物折納、類皆伍次輕弱、久之不能結絕(下略)。

(103) 長編二五三ノ五、熙寧七年五月甲辰。(前略)自開建熙河、歲費四百

萬緡、七年以來、財用出入、稍可會、歲常費三百六十萬緡。

- (104) 長編三〇二ノ二、元豐三年正月乙亥。經制熙河路邊防財用官言、置司以來、實收利入、元豐元年四十一萬四千六百二十六貫石、二年六十八萬四千九十九貫石。

- (105) 會要職官四三ノ四八、熙寧七年十一月十二日。權發遣三司使公事章惇奏、已差李杞等、提舉收買川茶、省司已應副本錢、今更有事節(中略)、今來初擬置茶場、官中本息錢數有限、慮恐熙河路輒有侵使、乞於茶稅息錢內、每年認定四十萬貫、應副熙河、博(博)馬并羅買糧草、餘外錢物、並本司稽管、從之。

- (106) 會要職官四三ノ四七、熙寧七年九月十六日の條。また長編二八四ノ一七、熙寧十年九月庚午にも、依茶場司所收息錢、變轉金帛、助熙河路博馬。の文がみえる。

- (107) 長編三四八ノ十二、元豐七年九月辛丑。經制熙河蘭會路邊防財用司、上歲計合用錢帛糧草、詔歲給錢二百萬緡(中略)、權茶司錢六十萬(下略)。これが長編三六五ノ三三、元祐元年二月庚午では、提舉權茶司熙河路歲收息并應副經制司茶折剩錢共六十萬となつてゐる。

- (108) 會要職官四三ノ四七、熙寧七年七月八日の條。

- (109) 會要食貨三ノ一五、宣和四年十二月八日。尙書省擬修下條、諸渠・合州・長寧・瀘川軍所產茶、輒出本州界、及夔州路茶入潼川府、通販川茶地分者、並依私茶法、當職官故縱・若透漏、聽權茶司按劾、右入潼川府夔州路并權茶司勅、詔依。

- (110) 前掲注(17) 参照。

- (111) 長編三三四ノ十二、元豐六年四月戊申。同提舉成都府等路茶場陸師閔言(中略)、又言、永興等路、惟是金州所出・及影帶透漏山南私茶・或南方雜偽末茶、其價高貴、陝西之民、良以爲苦、乞計置川路餘羨茶貨、編入陝西諸路州軍・出賣、並依秦鳳等路禁茶地分條貫、施行(下略)。

- (112) 會要食貨三ノ二四、元豐七年十一月二十二日。都大提舉成都府永興軍等路權茶公事陸師閔劄子、近准朝旨、應係般茶大路、並計置車子遞

青唐の馬と四川の茶

鋪(中略)、自商州上津至永興軍(下略)。

- (113) 長編三四〇ノ十二、元豐六年十月庚子(前略)。而金州所置三場收息、亦不下六七十萬緡(下略)。宋史一八四、食貨志、茶法下(前略)京西路金州、爲場六(下略)。

- (114) 會要食貨三〇ノ一五、元豐元年五月十六日。詔、應南茶、輒入熙河秦鳳涇原路、如私販臘茶法、其巡捕、如川峽茶入禁地法。

- (115) 會要食貨三〇ノ一八、元豐六年閏六月十三日。(前略) 諸陝府西路・並爲官茶禁地、諸路客販川茶・南茶・臘茶・無引雜茶、犯禁界者、許人告捕、並依犯私臘茶法、施行。

- (116) 宋史一八四、食貨志茶法下。

- (117) 會要食貨三〇ノ二五、元豐八年二月七日。尙書戶部言、福建路轉運副使王子京乞、并隣近兩浙・江南・廣東・復禁茶、諸路仍通商、未有朝旨、詔、在京及開封府界・陝西路通商之外、並爲權茶地。

- (118) 欽定四庫全書卷三十六、論蜀茶五害狀。(前略) 其五曰、陝西民閒所用食茶、蓋有定數、茶官貪求羨息、般運過多、出賣不盡、遂州多虧歲額、遂於每斤、增價、俵賣與人、元豐八年、鳳州准茶官指揮、每茶一斤・添錢一百、其餘州軍、准此可見、又茶法初行、賣茶地分、止於秦鳳熙河、今遂東至陝府、侵奪臘茶地分、所損必多(下略)。

- (119) 長編三八一ノ二二、元祐元年六月甲寅。朝奉大夫・戶部郎中黃廉、直祕閣・都大提舉權茶買馬監牧公事、始言者論權茶六(八)五害、請通商・復券馬・如舊制、蜀人疾茶官之專、在位者亦多主罷權、朝廷遣廉按實、廉奏、權茶如前使者所爲、誠害、若悉以豫民、則邊計不集、蜀貨不通、而國戶將有受其弊者、請熙河秦鳳涇原、如故勿改、以制蕃市、而許東路通商、南茶無侵陝西、以利蜀貨、定博馬、以萬八千匹爲額、所奏皆可、即有是命、使推其法行之。

- (120) 長編三九六ノ十八、元祐二年三月戊寅。都大提舉成都府永興軍等路權(權)茶司言、準勅、熙河秦鳳涇原三路、合用茶、依舊官爲計置、永興鄭延環慶三路、許商旅通販(下略)。

- (121) 會要食貨三〇ノ二八、紹聖二年四月十三日。陸師閔劄子、奏准朝旨、

陝西路復爲禁茶地分、(中略)欲乞候旨茶到永興軍日、從本司、行下川路諸茶場、更不發引過陝西界、其已發引前來者、各許依引、于陝西路、貨賣盡絕外、並依禁茶條貫、施行。

(122) 會要食貨三〇ノ三四、崇寧二年八月二十八日、(前略)程之邵奏、勘會、永興・鄜延・環慶・涇原路、舊來食用南茶、自權賣川茶後來、多有私販、抵冒刑憲、今若許令商販通入南茶、委是隱便、詔依。

(123) 會要食貨三〇ノ三五、崇寧二〇三〇年十月二十九日、詔、川茶毋得過陝西路南茶地分出賣、如違、依私茶法。

(124) 會要食貨三〇ノ三八、政和元年八月二十三日、戶部專切提舉京城所奏、准勅、臣寮上言、永興軍等四路、先係川茶禁地、後乘改作南茶地分、其四路民庶、依舊嗜食川茶、是以客人得便以奪(二字衍)、以奪官中厚利、伏望、特降(降)睿旨、令改作川茶地分(中略)、仍令權茶司、預行計畫般運、自來年爲始、出賣川茶(下略)。

(125) 會要食貨三〇ノ三九、政和二年八月二十六日、(前略)一、京城內、以水磨茶官賣、其京畿・京東・京西・河北・河東・淮西・兩浙・荊湖・江南・福建・永興・鄜延・涇原・環慶路、並爲客販南茶地分。

(126) 會要食貨三〇ノ三八、政和元年八月二十三日、(前略)看詳張鞏奏、見在食茶七萬五千餘駄、占壓本息共四百餘萬貫(下略)。

(127) 會要食貨三〇ノ二八、紹聖二年四月二十二日、都大提舉成都府等路茶事陸師閔言、準朝旨、陝西路復禁茶、今量度、自鳳州至永興軍、先次添置茶遞鋪、更不和雇百姓外、其餘買茶場、各般至鳳州等處、不可置鋪、並合依見行願役般茶條例(下略)。

(128) 宋史三三四、李稷傳、(前略)俄提舉蜀部茶場、甫兩歲、羨課七十六萬緡、擢鹽鐵判官、詔推揚其功、以勸在位(下略)。會要食貨三〇ノ一五、元豐二年四月五日では、李稷言、自熙寧十年冬、推行茶法、至元豐元年秋、凡一年、通計課利・及舊界息稅・并已支見在錢七十六萬七千六百緡。とある。

(129) 會要職官四三ノ五〇、熙寧十年九月二日、詔、提舉成都府等路茶場司

李稷乞、應于本司職務措置・申請辭訟等事、他司毋得干與、如處置屈抑、許經歷司申理、從之。

(130) 前揭注(79)

(131) 會要刑法一ノ一一、元豐二年五月十二日、成都府等路茶場司、上茶法勅式、詔行之、先是、詔提舉成都府等茶場李稷編修、至是上之(下略)。

(132) 長編二九ノ十二、元豐二年八月己亥、權陝西轉運使・都大提舉成都府路茶場李稷、乞徙提舉茶場司於秦(秦)州、從之。

(133) 宋史三三四、李稷傳、(前略)與李察皆以苛暴著稱、時人語曰、寧逢黑殺、莫逢稷察(下略)。

(134) 長編三二九ノ十九、元豐五年九月戊戌の條參照。

(135) 宋史三三二、陸詒、陸師閔傳。

(136) 宋史三三二、本傳、(前略)熙寧末、李稷提舉成都路茶場、辟幹當公事(下略)。

(137) 會要職官四三ノ一〇一、宣和四年四月十一日、同四三ノ一〇二、宣和五年十二月十五日の各條。

(138) 會要職官四三ノ六五、元豐六年十一月九日、(前略)一、本司舊於成都府秦州兩處置司、各有廨宇人吏等、今並乞依舊、仍於兩處・各置管幹文字官一員、許不依常制、奏差承務郎以上・或選人充。仍並依幹當公事條。一、幹當公事官・見管七員、內二員係奏差、五員係吏選差(下略)。

(139) 會要食貨三〇ノ一八、元豐六年閏六月十三日、(前略)諸幹當公事官、川路二年・陝西二年半、爲一任。

(140) 會要職官四三ノ九九、政和五年五月七日、詔、茶事司循法舊制、特許辟官、訪問、比來不顧公議、多引四川土人(下略)。

(141) 宋史三三二の本傳では、不三年、提舉本路常平とあるが、これは多分誤まりであろう。茶場司の同提舉は提舉常平待遇であつたため、こうした誤まりが生じたと考えられる。

(142) 會要食貨三〇ノ一八、元豐六年閏六月十三日條にその全文を載せる。

佐伯氏の茶法資料では三一條から三三條までの條項の分け方に混亂がある。

(143) 長編三三四ノ十二、元豐六年四月戊申。(前略)(陸師閔)又言、成都府據川陸之會、茶商爲多、常患物貨留滯、不免賤入居停之家、乞於成都府博賣茶都(都茶)場、許隨宜增價出賣、及博易諸般物貨、卻行變轉、其所增利息、並依川路賣食茶・及陝西博易條、施行(下略)。

(144) 欒城集卷三十六、論蜀茶五害狀(前略)。於是奏乞、於成都府、置都茶場、客旅無見錢買茶、許以金銀諸貨・折博、遂以折博爲名、多違公人牙人、公行拘欄民間物貨入場、賤買貴賣、其害過於市易(中略)、及近歲立都茶場、緣折博之法、拘欄百貨、出賣收息、其間紗羅皆販入陝西、奪商賈之利、至於買賣之餘、則又加以質當(下略)。

(145) 劉忠肅集卷五、論川蜀茶法疏。(前略)博易之事、他貨百貨、貿販苛刻、錐刀瑣屑、無不爲者、依茶爲名、通曰茶息、商稅務坐視漏失歲課、而不敢有所論也。至于商賈算請者、平時便私散・之州郡茶地、今則一集于成都之都場、高其估以與之、又總計平事所之州郡遠近道里之費、入之、故都場之取息又如此(下略)。

(146) 長編三三四ノ十二、元豐六年四月戊申。(前略)按稷領治茶事、於五年間、除百費外、收穫淨利四百二十八萬餘貫(下略)。

(147) 宋史一八四、食貨志茶法下、(前略)自熙寧七年至元豐八年、蜀道茶場四十一(下略)。

(148) 長編三六六ノ二、元祐元年二月癸酉。詔戶部郎中黃廉、按察川路茶法、具利害以聞。

(149) 長編三七〇ノ二、元祐元年閏二月。是月、殿中侍御史呂陶言、(中略)、按察川茶黃廉、近詣兩府、稟議利害、皆爲章惇所沮、且言、茶法決不可改、富商大賈異論不足聽、惇出近言、欲仍舊權茶也。

(150) 宋史三四七、黃廉傳。

(151) 欒城集卷三十六、論蜀茶五害狀、(前略)然臣再詳、師閔所營茶利、雖使之衰歛・一一如數、止於二百萬貫、無復贏餘矣、若以前件茶引・茶稅・雜稅・酒課利等錢、約七八十萬貫折除、即止約有利一百二十餘

青唐の馬と四川の茶

(152) 萬貫、若更除茶遞養兵衣糧・及官吏緣茶所費、約三四十萬、即是師閔百端非理、凌虐細民、止得八十萬貫(原注、前件兩項錢、並且從小約計、故師閔所得利有八十萬貫、若依實計之、恐不及得此數)(下略)。

(153) 長編三八一ノ二、元祐元年六月甲寅。(前略)今蜀民通患、幣輕錢重、商旅齊攜、息不償費、若捐權茶、盡予商賈、則百貨未能通流、腳乘未能猝備、非惟園民之貨鬱滯、絕其資生之路、若蕃市交易・萬一不繼、亦足以害繼久之法(下略)。

(154) 前揭注(119)參照

(155) 欒城集卷三十九、申本省、論處置川茶未當狀。

(156) 前揭注(120)參照

(157) 前揭(154)。(前略)若比之今來有司所議、但權名山・梁・洋三處、放行益利諸場茶貨、其利有四、名山・梁・洋三處、權法如舊、而不權之地、犬牙相錯、權與不權、茶戶利害相遠(下略)。なお會要食貨三〇ノ二六、元祐五年五月七日、六年正月二十五日、參照。

(158) 長編三八一ノ二、元祐元年六月甲寅。承議郎・都大提舉成都府永興軍等路權茶・買馬監牧公事陸師閔、降授奉議郎・主管東嶽廟(下略)。

(159) 前揭注(119)參照。

(160) 長編三八四ノ十八、元祐元年八月辛卯。戶部言、按察成都府等路茶事司奏、乞先次廢罷成都府在城博賣都茶場、止令產茶州縣・元置場處、依未置都茶場日、任便販賣、從之。

(161) 長編三九一ノ十、元祐元年十一月壬申。殿中侍御史呂陶奏、伏見、利州路轉運副使蒲宗閔、始附會李稷、以賣茶爲名、興販諸物、貪息冒賞、累次遷官(中略)、詔、蒲宗閔等、先次放罷(下略)。

(162) 長編三九九ノ十、元祐二年四月丁未條、宋史三四七、黃廉傳參照。

(163) 長編四六八ノ十五、元祐六年十二月庚申。夔州路轉運判官程之邵、爲都大管勾成都府利州路茶事。

(164) 宋史三三三、程之邵傳。

(165) 會要職官四三ノ七一、紹聖元年閏四月九日。樞密院言、買馬歲額錢約五十餘萬貫、自開拓熙河、運川茶・易戰馬、其後官司・務在收息趁

賞、不以國馬爲急、至高增茶價、盡折馬司錢鈔正帛、以充本司之息(下略)。

(165) 會要職官四三ノ七一、紹聖元年六月十日。都大管幹陝西等路茶事(陸師閔奏、伏見、買馬用茶博易、每以茶價增長、侵賣(?)買錢物爲害、竊緣茶事司歲課浩大、其費茶之數多、而博馬之用少、不可以博馬之數、減損賣茶價直、捐棄厚利(下略)。

(166) 會要職官四三ノ七四、元符三年九月二十七日。(前略)程之邵申、(中略)今訪聞得、近因熙州邊事後來、並不將馬入漢、只用水銀・麝香・毛段之類、博易茶貨、是致馬額虧少(下略)。

(167) 會要職官四三ノ七五、建中靖國元年四月三日。戶部狀、茶事司奏、蕃戎性嗜名山茶、日不可闕、累年以來、買馬大段稀少、蓋因官司及客旅、收買名山茶、與蕃商、以雜貨貿易、規取厚利、其茶入蕃、既已充足、緣此遂不將馬入漢中賣、有言「害」馬政(下略)。

(168) 職源撮要、都大提舉茶馬の項。(前略)大觀以來、茶馬之政廢、川茶不以博馬、唯市珠玉、故馬政廢(下略)。

(169) 會要食貨三〇ノ二六、紹聖元年十月二十八日。都大提舉成都府等路茶事陸師閔狀、今相度下項。一、陝西路復爲禁茶地分、盡數收買雅州名山縣茶、般赴陝西路州軍、應付博賣、餘並依見行條法、施行(下略)。

(170) 會要食貨三〇ノ二九、紹聖四年二月二十四日。新權陝西路轉運副使張

元方言、利州路新(所)產茶、乞依元豐條法、復禁權、從之。

(171) 會要食貨三〇ノ三〇、紹聖四年四月二十一日。詔、成都府路產茶州軍、復行禁權。

(172) 會要食貨三〇ノ三〇、元符元年九月十九日。都省批下、都大提舉成都等路茶事司奏、準勅、成都府復置博馬都茶場(下略)。

(173) 梅原、前揭注(一)論文。

(174) 長編三四ノ十二、元豐六年十月癸巳。提舉茶場陸師閔言、每歲所收息稅、以百萬緡爲額、除應副別司年額外、並於陝西等路封樁、以待詔用、從之。

(175) 例えば會要食貨三〇ノ三八、政和元年八月二十三日、を參照。

(176) 續資治通鑑長編紀事本末百四十、崇寧三年四月辛酉の條。(前略)然當時運糧入中、不計價直之貴、鄴郡米斗不下三四貫足、陝西騷然、民困兵疲、惟富商大室、坐收百倍之利(下略)。

(177) 建炎以來繫年要錄一八、建炎二年十一月庚子。初成都府路轉運判官趙開・言權茶買馬五害、請用嘉祐故事、盡罷權茶、仍令漕司買馬、或未罷、然亦當痛減額、以蘇園戶、輕立價、以惠行商、如此則私販衰而賊盜息矣、朝廷然之、擢開同主管川陝茶馬。是日開至成都、遂大更茶法、官買賣茶並罷、倣政和都茶場法、印給茶引、使商人・即園戶市之、(下略)。